

アラン

文明国の戦争で真
の原因になるもの
(上)

翻訳 高村昌憲

はしがき

- 第1章 私がこの企てに入った理由
- 第2章 情熱的な判断
- 第3章 情熱の判断に反対すべき何らかの行為
- 第4章 隣人の欠点を余り考えないこと
- 第5章 一緒に前進し、一緒に考えないこと
- 第6章 勇気
- 第7章 騎士道的感情
- 第8章 平和主義者たちの間違い
- 第9章 戦争は情熱による行為なのです
- 第9章の2 純然たる喧嘩
- 第10章 軍人の本当の美德
- 第11章 人間嫌い
- 第12章 名誉
- 第13章 如何に作家と政治家は情熱をかき立てるのか
- 第14章 戦争と特権
- 第15章 或る代議士への手紙
- 第16章 戦時体制における不平等
- 第17章 軍隊での不平等は決して真の価値によらない
- 第18章 将校殿
- 第19章 権力者たちと戦争時体制
- 第20章 必然性
- 第21章 戦争の真の原動力である名誉
- 第22章 死の競争
- 第23章 名誉の力
- 第24章 情熱というものによって更に強くなり糧になる憎しみ
- 第25章 戦争に関する世論
- 第26章 正式見解への心遣い
- 第27章 服従する義務
- 第28章 党派
- 第29章 大地とあらゆるものの平和
- 第30章 雄弁術
- 第31章 言葉と行動
- 第32章 不変的理由と偶発的理由
- 第33章 戦争と教会
- 第34章 戦争の不思議
- 第35章 決定論と戦争宿命論
- 第36章 宿命論と狂信的行為
- 第37章 宿命論と悲劇
- 第38章 宗教又は無宗教
- 第39章 宿命論が持っている美のこと
- 第40章 自分自身への嘘

ALAIN

DE QUELQUES-UNES
DES CAUSES RÉELLES
DE LA GUERRE
ENTRE NATIONS
CIVILISÉES



Cahier Alain 2

INSTITUT ALAIN
LE VÉSINET

après avoir eu le plaisir
de recevoir de Monsieur
Masanori Takamura

文明国の戦争で真の原因になるもの

悪徳は戦争を煽り、美德は戦う。(ヴォーヴナルグ)

はしがき

作者がここで先ず始めに言いたがっているのは、多分一度ならず繰り返して政治的殺人と暴動を非難することです。

私がそれらをここに委ねているように考えることは、既に余りに凶々しく大胆すぎます。何もつけ加えないことを私は懇願します。

しかし、私は繰り返して言いませんが、私が同様に言いたいことは砲兵隊の伍長としての役割に厳格に服従した証拠も十分に示してあることです。もし人々がこれから読むものと、この表明が一致させることが困難ならば、そのことは彼らにも私に一度ならず読ませなければならぬことを証明しているのです。

1916年1月14日
(金曜日、夕方六時、休暇中、
16日日曜日に出発)

私がこの企てに入った理由
(COMMENT JE SUIS ENTRÉ DANS CETTE ENTREPRISE)
1916年1月18日

私は大きな障害に気付きます。何故私は無謀な企てに入った理由を言わないのだろうか。私が戦争という出来事を考えていた或る日、一日やそこらで或る人々は歳を取ったし、私が考えたことは、もし私が神というものを信じたならば、神が私を守ってくれるのは極めて明らかであると言わねばならないことであり、それは私に余りに明白な危険から逃れる方法としての時間と場所が一致する靈感を与えてくれるが、恐怖も逃れて行きます。そして勿論、私は病気には恐怖を持っています。神とか神々が存在すると私は少しも信じません。信じる意志もないし、必要性も望みも持っていません。その時に熟考して、感謝という生き生きとした飛躍と私が何ものかになるという感情を持つことが出来ますし、過去にそれがあったとするなら宗教的感情です。私は世界全体に誓ったように見えましたし、私が持ち続けたこの生活は今、何か重要な作品に捧げられているように思えました。作品のためであるなら、私は決して疑ったりすることさえありませんでした。私が両眼で何度も見てきた物事は、余りに雄弁に物語っていました。そして、それは殆ど国家間での平和を確信する方法を適用して考える人間のものではありません。それらの方法に関して、私は長い間躊躇しないように十分に自分の本来の力を知っていました。というのもそんなにも難しい問題はなく、私は長い時間と忍耐とによって、私のためにそして人のために少しは解明するまでになっていました。私は、今は唯一の問題と呼ばねばならないこの問題において、他の方法を使用しないことの方がより理性的であると理解しました。そして、何故そんなことを言うのでしょうか。それはまさしく先ず速度を落として分析の働きを確かなものにするためであり、情熱の感情を直ぐに排除するためです。というのも、それが方法であり目的であるのが分かるからです。私は決して全てを納得させることを望みません。私を納得させることさえありません。何故なら、人は確かに戦争の恐怖を持つのは体験が多く見させて来たからです。しかしながら人はそれをやってきたし殆ど愛しています。そのことは良識とは何かを言うてもらうことであり、つまり理性はここでは全く力がないということになります。勿論、屈服させなければならぬのは、まさしく情熱の感情のこの力です。私には決して他に目的がありません。ですから注意することです。私はここで叫び声を上げさせるまで死者や負傷者を見せつけるつもりはありません。同情や憐憫はよく激昂に変わります。愛が大きいと、愛する者を殺すこともあります。一口で言うなら、情熱というものは遊びや賭けそのものに激怒します。よく考えるなら、戦争は間違って調整されたが基本的に愛と憤慨と優しさの結果です。しかし、それは何回も言うことではありません。私の読者には結局は慣れ親しんだ大変に古い見方をするなら、忍耐を忘れていないとしても情熱は決して自ら調整しません。それらを慣らすか、徒刑場で終わらせねばなりません。そして、懲罰は裁判が齎すものではありません。そうです、情熱そのものが齎すのであり、戦争が大変に雑な性格を持った人々の中で示されるのと同じです。私はこの様にしてこれから説明しようとする問題をかなり明らかにするまでになります。それは他人のためであり、私のためでもあります。それは戦争という悪が長い情熱への自己満足の結果であるということです。最も悲しい時間の中で、私は次のように大変に賢明なことを言うようになります。「服従の年月を償わなければならない」。しかし、少なくともそれらの原因を見付けるためには経験が役立ちます。それ故に忍耐することです。私は一方の障害に近付き、そして他方の障害にも一寸触れて同意するか非難することです。成る程、私は文書を書くことで喜びを手に入れますが、償わなければならないのも喜びです。戦争のための戦争は、既に戦争です。戦争は見ても恐ろしく冷酷で、従ってその上何の役にも立たないのは余りに明白で、私は如何にしてそれが準備され、不意に来て、長引くかということを確認に言うつもりであるが、一人ひとは戦争に何を望んだかも把握したいと思います。一人ひとりが一番最初の言葉を拒絶しようと思うのは辛

い考えです。もしもそれがあなたにとって余りに耐え難いようなら、この本を放擲して下さい。私はその他のやり方や決まり切ったことを受け入れないで、私自身のことを平然と書くのを誓ったのは少なからず本当です。何が起ころうとも。

(完)

情熱的な判断

(DES JUGEMENTS PASSIONNÉS)

1916年1月19日

私の話は準備が必要です。準備の中に全てがあります。私は、哲学に精通する読者のために書きません、その人は情熱と判断というものが何かを知っていて、あるいは知っていると信じています。そして、それで結構です。それ故に幾つもの目的に役立つ事例によって、私は情熱による判断が何であるかを説明しなければなりません。

戦争が始まって十七か月後に、私は六日間の予定で新たに市民の人々に加わった時、次のような話を聞きました。パリの小学校教諭集会において、ここでは何でも構わないが或る目的のために或る人がフランス人の仕事に外国人が参加することを話しながら、次のように言うまでになりました。「これらの憎しみは制するように願わなければならない」。これは叫びと呪いの恐ろしいコンサートで、満場一致で「憎しみは駄目だ、駄目だ」の大合唱になり、演説者は一言もつけ加えることが出来ませんでした。

私はフランス人とドイツ人がお互いの溝をあちこちで結びつけていた多くの外国人との友情の例を、容易に反対することになります。これらのことは良く分かっていましたが、結局のところ砲兵は噂でしか分かりません。しかし、私は我が国の人間が、煙草やチョコレートを捕虜に与えているのを見ました。そこから戻って来て、そして全く素直に次のように言うのを目撃しました。「何て善い顔をしているのだろう。彼らは私たちと同じ人間だ」。

そこには私が決して求めもせず大きくなることもなかった反対の感情がありますが、そのことについて考えるのは良いことです。憎しみは自らを上手に守るためには必要ないことが分かります。遠方でこれらの間違った関係を産み出しているのは想像力です。しかし、大変に大きな叫び声を上げていた憎しみを特に点検してみましょう。公務員たちが、下手な喜劇役者のように権力者たちの気に入られようと努めたり能力に欠けていたと私は決して言いたくありません。それはそんなにも単純ではありません。私は寧ろ、同意するのを確信して過度の感情へ彼らを追いやり、自己満足を手に入れて、そして付ける薬が無いのだと思っています。彼らは他のやり方で戦えないのを別にしても、情熱的な叫びに全ての力を注いでいたのと同時に、要するに大変自然な苦悩を表現していたのです。悲劇の時代は良いのですが、平和の時代に同種の判断力は、際限なく武装化することよりも、更にもっと危険でないか否かを理解しなければなりません。その点についてもう一度簡潔に言います。崩壊した村で、私はボーア人と戦争していた時代のイギリス人が酷く虐待されたリールに一週間留まっていた。幸いなことに憎しみは無くなっていましたが、彼らの全ての力は永遠を信じることから齎されています。

私はこの章を更に何よりも困難なことを言って終えたいと思いますが、それはもう少し前に、教義の中へ入れさせるものです。それは外的な出来事において情熱が原因になるということを感じるのは、情熱の間違いです。憎しみは全てがそれ自身で正当化されています。しかし、憎しみ

の本当の原因は、憎しみです。それは憎しみの感情そのもので増大します。それを証明することが出来るものというのは、憎しみが齎します。私は憎みます、そして私が憎むのは尤もであることを全てがその時証明されます。憎しみは他の人の裡にも引き起こすことを除いても、その人は既に私の憎しみを増大させており、既に証拠を示しています。

人間は他人のことを話すのが下手であり、あらゆる機会において間接的に脅しています。彼らはお互いに出会います。最小の動作が反論を齎しますし、結局のところ戦って敵を作ります。攻撃が攻撃を呼びます。自己に対しても激しい怒りがなくはありません。そこに僅かな言葉にも歴史というものがあります。しかし、それは解明すべきことであり、一步一步説明すべきです。私の筆もゆっくり書きます。戦争には出発しないで下さい。

(完)

情熱の判断に反対すべき何らかの行為 (QUELQUES FAITS À OPPOSER AUX JUGEMENTS PASSIONNÉE)

1916年1月21日

情熱の判断について矛盾した見解が、十分であることから程遠いのを私は知っています。人々は気に入ったものを真実と呼ぶのです。例えば悪人と言われている人々に不名誉な噂が立つのと同じです。そして、方法として情熱に逆らうことにある精神の立ち直りの強さを知る人は少なく、実践されることもごく僅かです。それ故に私が他の例を挙げるとするなら、敵の思惑で行われる略奪や殺人があります。そこでは全てが真実であるか否かを私は決して自問しません。如何に知るのでしょうか。戦争はあらゆる怪物を自由にして、犯罪の歴史が至る所にあるのを証明していることを、私は少なくとも考えさせられるだけです。私がこれらのことを考えねばならなくなるのを喜べない三種類の行為を思い起こします。第一に、殆どの新聞で捕虜の死を母とか未亡人に知らせるドイツ人医師の文書を誰でも読むことが出来ました。一般にそれらは必要な限り騎士道的で非常に美しいものです。第二に、私が知り、私と同じに多くの人々が知ったことですが、エッセイ付近で我が軍の飛行機が墜落したのを見たドイツ軍の飛行士たちが我が軍の村に一通の書状を送りつけました、そこに書かれていたことは二人の飛行士が即死してエッセイの墓に丁重に埋葬され、墓標を立てて分かるようにしたとのことです。第三に、数日間敵の処にいた所謂フリレーの哀れな女性引揚げ者は、熱のこもった演説の後で私に言いに来ました。「私は一頭の雌牛を守ったし、未だ生きています。というのはあなたもご存知の様に、彼らは何人かの子供のいる女性に雌牛を一頭置いて行きました、そして私には四頭の雌牛がありますが、その中の一頭は大変小さいです」。

もしあなたは私が言うことが好きでないが、そうは言っても他のことと同じ様に信用するに値するなら、あなたは大変自然なものとして自分の情熱や欲望に従って判断し、敵も同じ位に憎んでいることを証明していることになります。しかし、よく考えて下さい。これらの憎しみの矢は決して人を殺しません。そして、軍隊は憎しみによって戦うと信じている人に対して、私が声を大きくして言った後でも止めなければなりません。あなたが気に入っていることは真実で、気に入らないことは偽物であると信じているあなたの気質に従って行くことが今は問題として残っています。同意された欲望の側面と模倣の側面と、どちらを判断するのでしょうか。あなたは決して判別しません。情熱による判断そのものは、あなたが自分自身に正直になることです。それは情熱の最高の結果であり、屢々それに付ける薬はありません。その様な判断を養いながら権力が多く生まれたのか否か、私は決して分かりません。私には関心がありません。私はあなたに、全てが良く知られている有名な例として提供しているのです。その問題は、寛大さによって平和な時にはあらゆる国を戦争へ向かうのを止めさせて、それと同時に理性によってあらゆる力が拒絶されるかどうかを知ることにあります。そして、それは恐らくあなたが先ずびっくりする観点を、あなたの考察に提供する瞬間です。戦争の原因は利益とか渴望の中にあるのではなく、好戦的

な活動を早める予見出来ない事件の中や武器の備蓄の中にあるのでもなく、その多くは快くそして崇めることさえある情熱の中にあり、誰もそのことを余り疑わしく思っていないのです。

(完)

隣人の欠点を余り考えないこと

(NE PAS TROP PENSER AUX DÉFAUTS DU VOISIN)

1916年4月8日

私はドイツ人たちの犯罪を描いてある美しくもない絵葉書を戦争中に受け取りました。私はこの種の文学を拒絶していますし、1870年の一連の普仏戦争で既に知っていました。もし戦争を終わらせるようにするなら、その時私はその様な絵画や物語によって情熱がうまく保持されていることを望みます。しかし、名誉や安全が許されている限り、平和を守り続けるのを目的にしている者はもう少し純真であってはならないし、陰謀や罠を避けねばなりません。それは隣人について聞いた悪口を繰り返して言ったり人を喜んで迎える分別ある理性的な人間の決まりきった生活には、決してありません。更に、少なくとも自分の敵を信じたり、余りにあくどい人間が重要であるとしても、それは決してありません。その様な人間に対して私は、厳格な礼儀や挨拶をすることを義務としています。そして良く見てみると、面と向かって言うこともない知りたくもないこの礼儀なくして、平和であり続けることは決してありません。そして、大変に気高い人間はパン屋の店先で言われたかもしれなかったことを、食料品屋の店先で答えることはないのです。行為を起こしましょう。もし決まりきった戦闘で品行が悪かったなら、そのことを楽しく語るに理性は要らないし、あるいは発射を求めないかも知れません。そして、分別を持っていて強いなら、それが真実であっても、大衆の平和に反対するような最悪の言葉を法は罰します。結局のところ一言で言えば、一人ひとり気難しい隣人と平和に暮らさなければならないこととなります。そして、それが出来るようになる方法は、絶えず巧妙に罵ることではありません。しかし、人々は平和のことを考えません。彼らは全く率直に情熱に従い、起きて仕舞ったことを話します。その後で敵が出来てびっくりします。そして、注目に値することですが、国家は最も粗野で厚かましい品性の市民たちの後に従っているように私には見えます。外交官たちは悪を償う様なことはしません。そして、一人ひとりここで何かが出来るのは明らかです。そして、人が話していることを私は全て真実と見倣していることに気付いて下さい。行為については言うべきことが沢山あります。行為の説明や解釈についても言うべきことは沢山あります。例えば、強力な爆薬を開発したチュルパンや、人を窒息させるガスの使用に憤慨することに多くを期待した人々とのことを言っているではありません。勿論、この議論は一方的です。

問題は後者にあります。厄介な隣人と一緒であっても、平和に生活しなければなりません。そして、そのためには彼らの悪口を話す楽しみを拒絶しなければなりません。あるいはもし憎むのを自分に禁じたくないのなら、人は戦争に期待し、決して驚きません。私は平和を愛しそして持ち続けることを知らなかった人々のために書きます。

(完)

一緒に前進し、一緒に考えないこと
(POUSSER ENSEMBLE ,NON PENSER ENSEMBLE)

1916年1月22日

マルク・オレールは言いました。「一緒に前進しなければいけないが、一緒に考えてはいけない」。そして、モンテーニュも少しそれに近いことを言いました、「群衆に肉体を預けること、しかし精神は助けること」。それらは、私が志願兵に志願する理由のためには良い思想になります。それらの思想は多分、その奥底に問題を生んでいます。もっと有名な言葉も挙げます。

「シーザーのものをシザーへ返し、神のものを神へ返しなさい」。決して如何なるものの奴隷にもなってはならない内面の判断を神と呼ぶことが出来ます。それは語るには曖昧な方法です。しかし、私はそれが重大な不都合とは思いません。観念を消さずにあらゆる方法で言葉から解放されなければなりません。〈祖国〉は私に全てを要求することが出来ますし、私は精神以外は全て与えますが、決して精神に政府は持っていません。しかし、ここで重要なことがありますので気を付けて下さい、それは政府というものは精神も世論というもので管理したがりです。勿論、遭難者のような時であるなら、救助するために私は全てを与えます。この戦争の間に私が最も腹立たしいことは、幸福と共に精神を生むのが自由であると信じていた人々を見ることで、まるで彼らは大きな負担から解放されていたかのようなようでした。私は敢えて言いますが、この罪を裁く振りをしながら私の友情に驚いていた人々のその罪を、私はやっとのことで許すのです。

(完)

勇気

(DU COURAGE)

1916年1月23日

同一の言葉で、皆で繰り返される情熱的な世論は、役に立って有用な狂信的行為を生むとよく言われています。要するにそれは大砲と同様に武器になります。大きな犠牲を可能にする信仰であり宗教であり、抑え難い飛躍となって、最後には勝利を確かなものにします。この論証は堅固です、何故なら平和な時や戦争の時でさえ遠くから判断する時は、実際の戦争状態を大変に間違っていて認識するからです。それ故にその点については説明しなければなりません。

想像力がそれだけで働けば働く程、つまり遠くからそれらを見る時、酷い恐怖が生じて対象を明確に出来ません。戦略について半分しか関与していない後方勤務兵は、発砲している者たちより後方にいても、より大きな恐怖を抱いていると言えます。それ故に遠くから危険を考える人間は、それと釣り合いが取れる位に夢中になれる力強いものが必要となります。そして夢中になって、変わらず、議論の余地がなく、狂信的になった判断力がなければ、何らかの危険な中に身を置くことは全く出来なくなると彼は想像します。実際の戦争でこの生々しい感情は、思考から大変に遠くなるのは事実です。その人間は基本的に決められた多くの行動によって多忙であり、創造すべきことを行うのは困難です。この思考することは感動と同じで、よく恐怖を消散させます。発砲地域にいると危険が至る所にあり、少なくとも偶然に決められているとも言わねばなりません。従って命令によって行動すると、今いる所に留まっているのが危険かどうかも分かりません。例えば通りを通過して命令を伝えに行くように私は命じられます。私がいる家にも砲弾が落ちることもよくあり得るという思いが、長い間私には実際にあります。兵士というものは宿命論であるというのは、大雑把な説明です。そして、爆弾投下装置が近くにある塹壕にいる砲兵の典型的な話としてよく引き合いに出すのですが、そこは確かに危険な持ち場です、でもその兵士は休息中の村で殺されたのです。以上の話は、戦っている兵士にとって何かの答えになるものです。そして要するに、逃げるのが安心出来る方策を与える指揮になるとは理解しません。大変に力を持った模倣を指揮につけ加えて下さい、そして同様に人間にとっての本当の宝を忘れないで下さい、ここでは恐怖を恐れる情熱に対する戦いなのです。恐怖に負けた時は誰も自分に満足しません。しかし、私が特に人間的なるものを取り戻すこととは、人がやることを行うことであり、やるべきことを行うことであり、他人がやるつもりでいることを行うことなのです。恐らく絶望以下の絶望でもあり、それがその人間の防備具を作ります。恐怖や熱狂はそこに来て死にます。要するに、戦火の元に人間たちを押し出す実際の動機と共に、座席の中で参戦する者の裡にある大変に滑稽で快い感情と全て混同させる必要はありません。ジャーナリストたちは戦場でやられた人間たちを見てきたので、大変にびっくりするに違いありません。実際に前線から遠くなるにつれて決まって熱狂が大きくなっていきます。それは細部にまで及びます。砲弾をくろう部隊にいる砲兵ともっと安全な場所にいる食糧補給を行う砲兵の会話において、最も安全な場所

にいる者が全く曖昧な勝利を盲目的に信じています。更に、泥だらけの歩兵にあって驚くべきことは、彼らは希望もないが弱さもない禁欲主義者です。彼らのことは理解出来ますし、覚えて置かなければなりません。戦うことに多くの意義を認めていたので非難の声を叫ばなかった人々は、これらの驚くべきことを考えて下さい。そして、叫んだ人々は立派に戦わないと私は言いたくありません。でも戦うのは別の人間です。この煙の様な人々は空へ上がり、服を脱がされて陰気で果敢な英雄が生き残ります。兎に角、戦争の準備とは教育して筋肉のトレーニングをして武装することです。本当に戦場にいる人間は穏やかで優しくさえあり、時には大変に気が利いていて、その考えを余り押しつけることはありませんでした。彼の怒りは決して主義主張によるのではなく、寧ろ結果です。その怒りは困難な時になると援軍の様に突然にやって来ます、恐怖に対して直接やって来ます、少なくとも恐怖に対してやって来ます。よく考えて見るなら、戦争の悲惨は内面のものです。そこから私が既に述べた騎士道的感情が生まれます。その飛行士は立派に自己に打ち勝った経験から敵の飛行士を尊敬します。憎しみや復讐心を、戦争を行うエンジンや爆発物のように話をするのはその後です。最初は下劣に見えます。勿論、愚かでしかありません。最後にはそれに気付きます。その様な人々は、人間に対する勇気よりも水や火に対するは少ないのでしょうか。憎しみは人々が言うように有益ではありません。有益なのは、そうです、統治するのに有益なのです。しかし、それは将来のことです。

(完)

騎士道的感情

(DU SENTIMENT CHEVALERESQUE)

1916年4月3日

この感情を強調する際には、困難な時代に書いていた人々によって多くが忘れられていて、彼らは恰も希望を殺しながら不幸を大きくしようと努めているかの如く書いていました。しかし、下劣な増幅器のような人々では放って置きましょう。騎士道的感情は敵への真実の友情であり、戦っている時でさえ試練を超えて情熱をなくして生まれ、当初の感情ではなくなります。哀れな新聞記者や解説者に、敵の勇気を公正に判断する人が一人もいないのは奇妙なことです。それは難しいことではありませんでしたし、熱意が小さくても行うことができます、というものは敵へ賛辞を送ることは誤算にならないからです。そのことは失敗を解明し、更に勝利を大きくするからです。しかし、侮辱して罵る喜びがそれを奪い取りました。私は戦争を経験した人々のことを話しているのですが、彼ら一人ひとりが気付くことが出来たのは、危険への長い忍耐と敵の認識が、敵の塹壕との間で戦争を産み出していますが、正確な言葉で言うなら真実の共感を生み出しているということです。一人ひとりには相手の試練と真実の思考を知りました。何故ならこの恐怖の生活は思考を本質に連れ戻し、その中で一人ひとりには人間という動物が驚くべき肉体の抵抗と素晴らしい精神力を発揮し、機会があれば大きくなると何時も思う様になるからです。従って如何なる偽善もなく、人間の真実が発見されます。そしてその時は小さなモラリストであり、動物のように噛む筈がありません。パスカルは全てを捨てるのを望んだ人であり、書きながら自分自身の体面は捨てました。「人が語ってくれるなら、私たちは喜んで命を落とします」。確かに人間の中で最も平凡な者は、探しに行かなくてはいけない事として彼自身の破壊を考える時、相手の奥深さというものを指摘しますし、そうでなければお互いに自分自身を軽蔑することになります。奥深さに到達すれば、よく知られた人となり、無二の人になります。オラトリオ会の教会の発展が砲弾の音から真先に逃げることにあるのを、あなたは頭に入れて置いて下さい。戦闘は人間とその人の恐怖との間で行われるものですが、同じ様に扱える筈がありません。そして、この戦闘は決して語られません。その人間は、今は少なくとも人間です、何故なら全く動物であることを止めているからです。そして、彼はもう人間しか高く評価しませんし、彼の中にもそれを見出します。そこから銃後の男たちには全然理解出来ない愛の感情が生まれるのであると信じなければなりませんし、捕虜への敬意、負傷者への看護、死者たちへの尊敬は、両者の陣営では当然のこととして行われ、腹を探る様なものではありません。従ってその間に、銃後では戦争が人を食わせており、演説は大袈裟になり、利潤を上げて太っていますが、前線では平和が悲惨さ苦痛によって信じられています。しかし、平和は本当のものであり、戦争それ自体を一掃させられるものです。要するに、それは平和に似たものを認めて支援したものではありません。あらゆる情熱はそれと対立しています。そのことが理解出来るようになるためには、自ら古代ローマの五賢帝の一人であるマルクス・アウレリウスに成らなければなりません。この精神の働きによ

って戦争の中で最も恐ろしいものが戦争を終わらせると言うのは本当です。そして、確かにマルクス・アウレリウスたちが死んで大部分の遺族たちが愛よりも憎しみの方が強い苦難を引きずっていたとしか余り知らなかったとしたら、私はここに書きません。戦争で息子たちが立派に成っても、長く続きません。

(完)

平和主義者たちの間違い (L'ERREUR DES PACIFISTES)

1916年1月24日

平和主義者たちの間違いは大きなものでした。あなたは今、それを裁くのです。彼らは正義の無い戦争というものに反対していました。しかし、戦争の中で最も正義があつて直近の戦争であつたなら、彼らは身を捧げます。彼らと彼らの主義に身を捧げます。此処では多くのことが起きますから、私は何でも言うことが出来ます。今は、正義の戦争でしょうか？ 勿論、敵も同じことを言っていますし、平和主義者たちも同じことを言っています。死、苦痛、悲惨という戦争における現実の不幸は、その戦争が正義でも、正義で無くても、何時も同じであると私はつけ加えて言います。「あゝ、神よ、もしあなたが存在するのなら、正義の戦争から私たちの身を守って下さい。私たちは断じて他のことをやらないと決めたのですから」。しかし、結局のところ平和主義者連盟の活動には子供じみた幼稚で愚かなところがあつたことをはっきりと理解しましょう。私が見る限りは以下のとおりです。彼らは政府側でした。政府の立場で立ち上げ活動していました。平和な政府を方針として求めていました。彼らの議論は権力を握むための議論でした。その外の人々の議論も勿論、大きな違いはありませんでした。大臣とか外交官も何時もそうです。これらの単純な者たちは話をしながら、両手に支配権を握っていましたし、〈歴史〉の申し子というものです。私の読者であるあなたに私は、もっと直接分かる行動様式にご招待します。ですから個人の儘でいて下さい。あなたは実際の行動の範囲で、本当の考えに従って独りで行動して下さい。それがしっかりした子供なのです。「もしも私が王様になったら」と、あなたは決して言わないで下さい。足を地面につけた儘でいて下さい。あなたの立場で話して下さい。演説するための演壇で言わないで下さい。国民に決して話さないで下さい。あなたの友、門番、食料品屋、大衆ではなくあなたの隣人に話して下さい。信じることから始めて下さい。そして、この行為が真実の行為であるとはっきりと理解することで、もっと良くなります。既に、この方法であなたはもうそんなに認められようと努めないし、人々を和解させようとも努めません。あなたがもっと強固になるためには、〈集団〉の弱さのことも考えて下さい。その中で、最も果敢ではっきりとした敗北が、極めて明白にしてくれます。その理由は、その瞬間が来ればそれで十分に分かります。何が分かるのでしょうか？ 私は社会主義者でした。そして、平和への愛によって私は、非常に曖昧で混乱していた大衆の考えを受け入れていました。でも集団の目的のために犠牲になつたりしませんでした。そんなことは全て無駄です。私の親愛なる読者にも罪と罰があります。いいえ、そうではありません。私があるあなたを案内するのはこの平和に対する戦いであり、それは独りでなければなりません。このことを頭の中に良く入れて置いて下さい。もしあなたが本を発行するなら、あなたの費用で印刷し、三人の読者しかいない方が良く、あなたが契約にサインする購読予約の申込者も十人いるかいない方が良いのです。要するに、もしあなたが政府にいても政府というものを信用していなかったならば、あなたは行おうとすることを言う必要はあ

りません。喜びも栄光も無い辛い仕事です。そして、報酬さえ確実なものは何もありません。平和の困難さは、一年をやっとの思いで骨を折って操縦することです。それでも平和にとって十分ではありません。しかし、死者たちのことを考えるなら、あなたは彼らが大変に美しいと思うでしょう。

(完)

戦争は情熱による行為なのです

(QUE LA GUERRE EST UN FAIT DES PASSIONS)

1916年1月25日

全然明白でなく、実行もされず、現代の習慣と反対であるが大変に必要なものである国家に対する個人としての政治を語る前に、私がおっきりと示している命題をもう一度明確にしなければなりません。決して容易に受け入れることが出来ませんでした。それは戦争の原因を利害の紛争と見做さないで、少なくとも情熱によるということです。この考えをもっと良く聞いて貰うために、私は今起きている様に敵対する国を、利益を分割する二人の夫婦に譬えます。一方が他方を殺す位に殴り合っていると言うものではありません。利益が相反する時、情熱は必ず行動すると一般に言われています。しかし反対に、もし議論や呪いで蒸し返された嫉妬や憎悪や我慢や情熱があるなら、何時も利害の中に多くの口実が見付かると私は言います。従ってそのことを良く注意して下さい、情熱は何時も私の言うことに反対します。同様に、好戦的な情熱の人々は何時も十分な論拠を与える術を持っています、例えばドイツはシャンパーニュ地方、ノール地方の鉱山、ブリエの鉄鉱石の鉱床、カレーを我が国から奪おうとしているというようなことですが、私は何を知っているのでしょうか。そして、それをしたのは作家たちであり、その他の者たちはドイツの覇権を夢想し、高等な哲学に解釈しさえしていると何時も感じられているのは全くおっしゃるとおりです。しかし、大きな間違いは大変容易にこれらの見方が進んで国民を戦争へ至らしめるということを信じることです。それは他の力がなければなりません。例えばその結果、五歳か六歳若い世代が罵られちるかどうか、そしてその後で称賛されているかどうかというようなことです。そうである時は、全員が辛抱出来ずに激しく怒り、熱狂して進んで犠牲になって前進します。しかし利益は何かある様なものではありません。少し考えて下さい、そして如何なる道を進んでも、人生を犠牲に追い立てることに利益は無いとあなたは理解します。私はリスクを負うことを言っているのではなく、犠牲になることを言っているのです。というものの平和であればある程、戦争は古代ローマ皇帝デキウスがキリスト教徒を迫害したやり方で、若者たちを深淵へ飛び込ませるようになります。そして、人は戦争にかかる費用をとことん計算しましたが、まさしくそれは味方を有利に働かせることになります。人は我慢出来ずに戦争に飛び込みますが、それは余りに長く待っていたためであり、避けられないかのように告げる悪い予言者たちの声を聞いたためです。最後は眩暈に似た戦闘の恐怖から飛び込みます。それは現代の社会主義者全員の心の裡にはっきりと理解されており、彼らは情熱を疑わずに賢明に観念を整えていました。それらの情熱は力強く、突然の性急な承諾によって理解されていました。つまりそれは戦争に効く薬を探す者たちは、病気でない党派をまさに治療しているのであり、彼ら自身で証明し、平和に生きる方が良い別の人々証明しようと努めているのであり、戦争は戦争しか育てません。そして、その他の人々は合理的な勝敗そのもの運命付けられていて、実際にそれらを吸収して、消化して、よく整理された言葉を育てて、情熱が走り回って捕らえられる本物の罠を見ることはないという

ことです。しかし、これらの非常に難しい観念は、別の側面からも捕えてみましょう。

(完)

純然たる喧嘩

(LA GUERRE PURE ET SIMPLE)

1916年6月2日

今から二十年前に、私はポンティヴィの少年たちとノワイアルの少年たちの純然たる喧嘩を見ました。徴兵時期になると毎年、これらの二地方は戦いを始めて、小石を投げて戦いました。私は一度、流血した負傷者を隠してあげました。ユジェーヌ・ル・ロアはペリゴール地方にも同じ風習があると言っています。そして、これらの戦闘は憎悪もなく長年に亘り行われてきました。これらの慣例になった儀式による喧嘩は前例や模倣によって行われ、そして特に怒りによって恐怖を治すという人間には大変に自然な活動として行われています。恐怖を話し始めるや否や、若者に他の薬を勧めないで下さい。何故なら彼に何を言おうと、我慢がならない屈辱が続くからです。それは気高いもので、外部から慰めても内面の感情に対して何も出来ないのです。しかし、もう一度言いますが、この気高さは余りに辛いもので、もし最初の活動でその気高さを失って仕舞ったならば、私たちが賛辞の花々を送っても十分ではありません。隠者の様にひっそりと生活していた強くて勇敢な名将が、死に損なったばかりのマッソンについて私に言いました。「この虐殺は選ばれたもので、最良の虐殺です、何故なら最も気高い細心さによって最良であるからで、そうです、そのことで彼は未来に脅えているのです」。この事実において戦争が老人や警察の権力を強くしたのです、と私は答えました。その老人はそのことをそんなにも長く考えませんでした。私たちが自由と権利のためでなければならぬものに報いる」と言うのを聞く時、それを聞いても美しくありません。私は厳しくて辛い真実を押しつけませんが、それでもそれらのことは言わねばなりません。

(完)

軍人の本当の美德
(LES VRAIES VERTUS DU GUERRIER)

1916年1月26日

戦争は残酷への回帰であるとか、何時も権力を持った隠された残酷さの結果であるとよく言われています。でも最も重大で根を張ってはびこらせている間違いについては言われていません。今まで私もそのありふれた考えを重々しく繰り返すように導くだけの反論者しか殆ど一緒になりませんでした。まさしく行動する人々の裡には憎しみは全く無いと既に私は言いました。しかし、もっと詳細に見てみましょう。残酷さは、泥棒や殺人者の裡に見られるように、通り過ぎて行く渴望です。しかし、1915年の軍人の裡にもあなたは何か同じ様なものを見るでしょうか。確かに最も好意的な場合で、もう少しのところで貧乏で税金が高くてリユーマチの人が多くなっても、彼に期待するものは何もありません。まさに栄光は余りありません、というものの英雄主義は卑俗であるからです。そして、殆ど哀れでさえあります、というのも哀れさは多くの不幸や苦難の連続で憔悴させるからです。そして、そこにあるのは軍人の本当の美德である簡潔さと偉大さというものの、頑固さ、忍従、自己に帰す意志、露呈した意志を見せてくれることです。つまり人間の真の気力であり、外国の援軍にはないものです。大地の上の大空には何もありません。独りの彼は盲目の力の中央に寄り集まっているのです。「この世界が原子に委ねられているのが真実の時、あなたが自分を整理するために持っているのは何ですか」とマルク・アウレリウスは言いました。そのようなものは言葉の無い瞑想で、私は二か月も前から200万人のことを考えています。行為において、取分け夜の始まる時に最も明らかに見せてくれるものは、車が往来し始める時、そして道路の一方の端に夜の色が現れて交替する時に見させてくれるものであり、それは驚くべき理性です。誰も注意していません。一人ひとりがやるべきことを賢明に行って、その行為の先を見詰めることはありません。彼の性格は敵に近づくにつれてより神経質になります。この観念に従いなさい。人々に誰何しなさい。あなたはついに彼らの正体をはっきり見ますし、彼らも同じです。しかし、あなたは最初に聞いた言葉を信用してはなりません。戦場から帰ってきた兵士は、容易におしゃべりになります。彼の本当の美德は、彼の心の中にもっと押し込められています。そして、虚栄心は偽の偉大さによって全てを駄目にします。その男たちは自分のダイヤモンドを守り、あなたの心を惹くために偽の小石を強調します。私は一度ならず繰り返して言いますが、正しい観念を支配するのは難しいことであるとよく理解して置いて下さい。それは何時ももぐもぐ口ごもりながら言いますし、決まり文句を言う人は打ち勝った道を通って確実な一歩から行きます。

もし私が話していることは間違いで、あなたは圧倒出来るようになったなら、その時は私がおの前に話したことと同じであると理解して下さい。それは戦争の原因が利益による衝突に違いないと望むことです。というのも美しい風土の豊かな地方を望むことであり、結局それは隣人の財産であり、そしてそれを手に入れるために人を殺すことで、大変に残酷なことであるからです。

それはまさに国の一番重要な産業として戦争を思いつく人々の罪です。しかし、その様な人々の数は多くありません。その残酷さも、特に話の中であるとか予備的な行為の中で示されていることです。その様な人々も大変少ない人数でしかなく、財産を作るために一人の人間を押しつぶします。しかし、物事を如何に運ぶかは次のとおりです。軍人の美德への賛辞の鐘が申し分なく鳴らされて、下劣な殺人者として英雄を見做したがるのは子供っぽい、と人々はよく感じます。真理はそれに抵抗し善を繋ぎ止めますが、混乱そのものです。その上で、あらゆる相違がこの観念に移行させられますが、反対するのと同じです。そして、もし英雄の美德が直接でない間接光線でそれらを再度温めたとしたら、大変に冷たくなるのはそれ以外の理論です。もう愚か者たちの説得に努める必要はありません。そして、一人ひとは自然に愚か者になります。用心して下さい。もしそれが辛いなら、報酬のことでも考えて下さい。

(次章へ続く)

人間嫌い
(DE LA MISANTHROPIE)
1916年4月5日

情念が何時も一番強く、渴望や怒りや野心は、私が入々に示してきている冷静な観念に何時も情念を齎していると言っているのは、多分やはり偽の〈賢者たち〉であると思います。私は人間嫌いの命題をよく知っています。けれどもそれは曲解されますが、驚いてびっくりして元に戻ります。多くの犠牲と大変に美しい忍耐と誠実さがあれば、個人的利益は敢えて言えば人事百般の王でないのは明らかです。しかし、情念には継続性があり、方策もあります。人間嫌いは、感嘆して見ることを覚える間に、或る種の復讐心から軽蔑したり憎む訓練をします。同胞たちが彼には良き光に見えますが、敵は地獄の光の中へ落下します。従って、悪い情念はそこで何も失いません。けれども熟考しなければなりません。私は同意しますが、ドイツ政府当局が発行したものは全て検閲せずに許しましょう。ドイツ国民の兵はそれが攻撃されたのを本当に信じましたし、そのことは余りに明白な儘残っています。そして、損得を考へることなく自分の人生を提供したのも明白です。それは私がシャンパーニュ地方で見た木製の十字架が雄弁に語っていました。「ここに祖国のために死んだドイツ兵たちは眠る」。要するに、彼らの支配を別にすれば、容易に分かるのは敵の心の裡には恐らく幾つかの面で私たちとは違ふ軍人精神があり、私たちと同様に人間は一般的に言っている利益そのものと結びつくことが少なくなればなる程、見たこともない勝利のために全てを捧げる覚悟をすることが多くなることを証明しています。

反論されることを私は予想します。これれらの哀れな人々は強制されてそこへ行っているということです。しかし、私たちも同じで、そこへ行くのは強制されていました。英雄主義は、観客が想像するよりもそんなに単純ではありません。全てが熱狂により始まり、強制により継続していきます。その次には苦難が魂を既にきれいにした時になり、美德が輝いています。一方の心の裡は他方の心の裡のようになって、人は気高く堂々として絶望を抱くことを覚えました。競争する両者の活動は、陰鬱な諦念とは別のものです。そして、その人間はたった一時間だけでも生きながらえる希望というものを失った時に、そのために死があるのではありません。そうではなくて、生き生きとしていても恐れることがあり、最高の飛躍の向こうに豊かさがあります。結局のところ、もう自分自身しか与えねばならない時には、寛大と高潔さに溢れます。

ところで夢想家の希望は、更に遠くへ行きません。平和と正義を保証するために、この地球上には十分な美德があります。そうです、沢山ありますし、なくてはならない以上にあります。しかし、照らされて明るくなっていません。精神が欠けているのです。人間たちは意地悪で、悪意のある人間嫌いに成っていると言わないで下さい。彼らは愚かであると言って下さい。それは決して治らないとも言して下さい。もしあなたがそのことを信じているならそう言って下さい。でも私は決してそのことを信じませんし、薬を試しています。幾何学においてまで判断の間違いが生じているのは、そうあらねばならないと見詰める困難さよりも理解する困難さの方が小さい、と私はかなり頻々に気付きました。兎に角、国民へ真実を言おうとすることがかなり頻々に行われていなかったのも、時間と苦勞が無駄になると断言出来るのは事実です。そして、希望を持つには大変に弱いこれらの頁を私が書くよりも、もっと時間を有益に使うのにどんなことがあるのでしょうか。しかし、それが弱いものであるなら、それは子供たちの方法になりますが、人間として一日でも存在することを手に入れる確信があることで、大変に強くなるのです。

(完)

名誉

(DE L'HOMMEUR)

1916年1月27日

ベルギー人たちに利益があるか疑問でしたし、危険が迫っていても力は不十分でした。けれどもその様にして作られているのが開戦の動きでした。空しくも私はそれらの理由を考えます。それに私には時間がありません。それらの理由は渦を巻いています。中風患者とか熱病患者の仕事です。事態は明白で、私が恐れている戦争のことを考えているのです。もし私が平和の方へ心が傾けば、恐怖に負けるでしょう。その後の私の人生には何があるのでしょうか。私は力に負けます。私は弱くて臆病な動物です。理性というものは何も変えません。私は軍事力に負けますし、恐怖に負けるのを知っていますし感じています。既に、私は不名誉な苦い果実を味わっています。私は武器を取り、命令を待っていますが、独りで考えることは自由です、それが一番目の幸福です。多くの人々と新しく行動を起こします。二番目の幸福です。私は教えられます。三番目の幸福です。もっと正確に言うなら私の敵は今私を踏みつぶすことも出来ますが、私を軽蔑することは出来ません。私はそこでは勝者であり、あつという間に勝者です。私の精神はそれらの処まで高められ、落ちることはありません。私が知らない力や経験したことのない未知の健康を齎す多くの仲間からの軽妙さを、開放感や陶酔感と比べれば、苦労は大したことではありません。こうして私は戦う名馬の様に走り回っています。道が同じなら国境も無く、一つの希望がやって来ます。私は最も狂ったざわめきを受け入れます。私が実際に不幸になる時には、退却しても遅すぎます。私は希望そのものと何ら違わない理由で、とっつき難い頑固者に成ります。そして、その人間は人を殺すということです。少しも残酷ではなく、欲望から生まれた野蛮さも少しも無く、少なくとも殺人者ではありません。文明化された最良の人間は最大の悪も働きます。美德は、まさに悪徳にないことを行います。そして、真実の全てのものにおいてそれが美しくなります。そこには戦争の危険があります。それを良く理解させてくれる例は今も絶えずあり、不正という思考がなく、大変に明白な利益がなく、伝統がなく、祖国というはっきりとした観念もありません。反対に、祖国という観念は今も生まれていて、犠牲的行為によって力を得ています。信仰は〈神〉を生みます。

それは〈残酷さ〉に対して身を守ることを意味します。しかし、私が述べてきた感情は、私たちの裡の様に彼らの裡でも演じているのは明白です。真犯人を決定するのは止めましょう、外交官の考えも止めましょう、恐らく大変にぼんやりとしていて混乱しています。ドイツ人の祖国は攻撃されたと大多数は信じました。敵の英雄は目覚めました。名誉は何時も一定していません。人は名誉のためにしか戦いません。人間や財産やお金の損失を懸命に列挙していた平和主義者たちの間違いを理解して下さい。しかし、自分の人生そのものを与えている者の眼に、これらの物の何を量るのでしょうか。

母親や姉妹も理解しなければなりません。その感嘆は恐らく敵の感情というものに勝ります。彼女たちは犠牲になることも望むに違いありません。驚きの一撃は、立派に戦う準備もなく行った蓄積された間違いが齎します。社会主義者の抽象的な原則を思い出そうと空しく務めながら、彼の混乱も同様に分析しなければなりません。

(完)

如何に作家と政治家は情熱をかき立てるのか
(COMMENT LES ÉCRIVAINS ET LES POLITIQUES FOUETTENT LES PASSIONS)
1916年1月28日

市民の義務は隠されています。忠犬の様にその後を追って見付けなければなりません、獲物を捕るには回り道になります。出版物や新聞というものは、あなたに損益計算書や国から国への返還請求書を二十回も作らせます。そして、平和主義者たち（あるいは平和神学者とかレットルは何でも良いのですが）の本は、これらの競争から一つの法律的解決を求めますし、それらの利益がもし単独で働いたら、介入の無いものになるかもしれません。弁護士の次の言葉を良く考えて下さい。「利益は何時も妥協するが、情熱は決して妥協しない」。ところで、これらの外見は全てが虚飾でしかありません。損得という競争においては、経験が分からせてくれたように、二十年も平和に暮らすことが出来ます。それ故に何時もそこで生活出来ますし、全てが元通りになり、和解し整えられます。ここでは万全を処理する法典のようなものに期待する必要はありません。よろしい、全く大部分の民事事件は、もし情熱が身に付いていたなら、裁判無しで解決しないのでしょうか。考えても役に立たないこの光景からあなたは視線を外して下さい。生まれてくる情熱を待ち伏せして下さい。そして、作家たちは太ります。次は一つの例です。あなたはこのような国民が長い退廃の後に再生したことを至る所で読みます。検討せずにその観念を受け入れます。唯一の誤りは少しばかり社会主義者や無神論者が行きすぎたことになっても、十世代も続いて悪口を言われることをあなたは理解しません。殺すのに慣れることを勧めるのと、若者たちへの称賛をあなたは見分けません。私は屢々、〈ジャーナリズム〉の塔を突然に造ったありふれた考えや決まり文句に反対しようと努めました。勿論、地方紙にも書きましたし、今でもまさに地方の作家たちに支えられていて、彼らはミサでも歌いたかったし、それ以後も歌ってきました。それはローマ教皇アガトン一家によって直ぐに取り入れられた帽子の型と同じようなものであったとバレスとか誰かが言っていたことで、場合によっては良くも悪くもなる型でした。私がそれらの人々に熟考を勧めても無駄でした。彼らは、私が反対するのを大変愛していて、アカデミー会員に反対する党派に入っていると言って切り抜けていました。同じ様に、ブリエとかランスとかカレーを植民地化したいドイツのような国が明示されたか否かです。同じ様に平凡であるとかないとか言われている小説が、大変に銜学的で、体重があって塩漬けキャベツのシュークルートの大食漢アスミュスのような人を百回も私たちに思い出させたか否かです。恰も優美で痩せたドイツ人や、腹の突き出たフランス人がいなかったかのようです。この文学や政治や〈粗悪品〉による脅しというものを考えて下さい。それらは、三年兵役が五十重砲兵中隊に値しないとか、一万丁以上の機関銃が三列の国境の有刺鉄線に値しないことに気付いている人々を、通りで静かに殺しているのです。この戦争の波の全てはあなたを引きずって災難の方へ連れて行き、無視していました。そして、あなたは何時もそこにおいて、多分今もそこにおいて仲裁裁判所の様な所を探していて、それは国家間の違いを規制しています。しかし、国家間の違いのために戦う人は誰もいないことを理解しています。その代わりに臆病でないことを証すために、どんな人間でも戦います。私はこの興奮を感じましたし、世論の前で或る種のパニック状態を感じ、「ねえ、終わりにすることだ。アカデミー会員の代わりに死んでやろう」と言っていた若者たちに、野生的な荒々しい毅然さを感じました。最も激しい戦闘で危うく死ぬ処だった彼らの中の一人は、私が愛していた静かな力強さで私に言いました。「だから放って置いてくれ。それは私たちに関係していることだ。死ぬのはあなた方ではない」。珍しいことに大統領選挙以後に、誰もが何かが増えて上昇したと良く感じましたが、それが私たちを戦争へ投げ入れたのです。しかし、大使館事務局の難しさは誰もがはっきり分かっていたし、何時も僅かな忍耐があるか否かで解決します。悲しいかな、各人の理解し難い謎の部分には、情熱という潮の流れに放擲されていました。一人ひとは、ルイ十四世に仕えた彫刻家デジャルダンという愚か者へ掛けた殆ど残忍な言葉（

年齢には同情ありません)と同じ働きで兵士にさせられていたのです。「今の時代を生きるのは気持ちが良い」。既に、戦場の地には十万人がいました。見て下さい、私は危険を全て含めてあなたにご覧に入れます。憎しみは和らいでいると敢えて言った人間のことを考えて下さい、そして彼は罵られました。あなたも罵られることを知って下さい、そしてもしあなたが、ドイツ人たちは私たちと同じ人間であり、私たちと同じ様に文明化された人間であり、私たちと同じ様に情熱に騙され、私たちと同じ様に信仰に厚く、私たちと同じ様に彼ら自身の最大の党派に殺されて、私たちと同じ様に軽蔑されることの恐れから殺されているのですと敢えて言うなら、あなたの家にも石が飛んで来るでしょう。私たちとの相違があれば、フランス人の没落と再生の話によって私たちは責められました。(安楽椅子に居残った人々は、ドイツ軍がフランスに侵入した普仏戦争の1871年に私が三歳であったことや、田舎で勉強していたことで、私のことを支持しました。でもこの精神の弱さは、実際には最も破廉恥で厚かましいものです。)シューベルトやベルリンの流行についての話をする彼らドイツ人たちも大変に臆病であると責められましたし、風刺画やアカデミー会員の文学者たちによる疲れを知らない揶揄によって責められていました。もしあなたがこれらのことに寛大さを持っていなかったなら、平和の中で眠っていて下さい。

(完)

戦争と特権
(LA GUERRE ET LES PRIVILÈGES)
1916年1月30日

大変見事に継続されているこの仕事は何処から来るのか、今は探さねばなりません、それは共和制とか帝国とかであろうと戦争の隊形を国家に与えるまで世論を少しずつ変えていきます。但し、社会全体においては、貧しい下層民を犠牲にして権力、贅沢、快楽、無為の時間を享受する支配者集団の人々がいて、自分自身を強固にして、努めて下層民から分離しようとしています。

気付くべきことであり、そして私が十分に予想しなかったことは武装地域に見られるものよりも、確かにもっと人間的で意味が深い領主と農奴の時代の歴史に存在していたと想像する状態に戻るまでに、この戦争は現状を実感させています。私はこの戦争からもっと別の結果というものを用意しました。昔の人と同じ危険や悲慘に遭っている隊長が、この辛い軍事訓練で結局は友愛を教えているというものです。ところでもし私がその話を信じるなら、というのも最初の二ヶ月間の活動と当惑は決して戦争になっていなかったからです、先ずは相当の思い違いが多くありますが、全員が地面に眠ったり、補給が二回に一回迷うことになると、野性的にむき出しになるのは平等です。しかし、私はこれらの事実を序でに話すだけです。今ここで述べるのは私が見たことです。私にはまだ百万人の証人が残されています。

あなたは大地を色づける沢山の人々の間で働いています。彼らの服の布地には泥が染み込んで付いていました。上等兵、砲兵上等兵、伍長、砲兵伍長たちは、道路の敷設者や班長が見分けられるように、入念に区別されています。この集団の人々の布地や服の仕立ては別物のように見えます。殆ど泥の斑点が無い靴を履き、きれいな顔色で、元気そうで栄養も良い顔をしていました。彼らは別種の人間です。その階級の人は何も作り出しません。陸軍少尉とか大佐も同じ贅沢な人間ですし、将校殿です。

私は決して判断しません。見たことを言っているのであり、沢山の原因を説明します。確かに貴族主義的な偏見を拒絶するやり方で、そこに最後の避難所を探し出し、平等に軍隊を組織するのは大変に難しいことです。そして同時に、戦闘組織はあらゆる野心家や暴君たちが持っている希望を消しています。今それを望まねばならないか否かを検討するのはあなたです。私はあなたにその理由とメカニズムを示します。もしあなたがその後でその歯車装置に身を置きたいのなら、私もそれを良く望みます。私は不平を言っていた砲手たちに言わなかったことが何度あったことでしょうか。「何たることだ。あなた方がこの戦争を大いに望んだのだ。あなた方は自分で身を投じさせられたのだ。今は満足しなさい」。この労働は殆ど読まれない可能性があります。遠く隔てていて、大変に自然な情熱による賭けという可能性もあり、戻って来て彼らは言います、「良い人生だった」。若者たちも何だかんだ言っても今は四十歳に成れば、順番に殺されるまで、通りで騒いでいます。不幸な年だった1914年8月2日に私は通りで良く響く歌を聞き、無邪気で純粋で若くて良く響く歌を歌う彼らは、私が知った唯一の本当の恐怖を覚えたのを、私は思い出します。孤独に成った女性のように、私はベッドに座り、耳を傾け、同じことを繰り返して言っていました、「流血を望んでいる」。情熱に対して何が出来るだろうか。非常に少ないです。しかし、それをやろうとしなければなりません。そして、精神に事物の真のイメージを強く刻み込むために、私は腐食して仕舞うインクであってもここで書かねばなりません。戻って来て飲んだり話したりして満足している軍人に腹を立てねばなりません。真実は何時も私の精神に示されます。もし私が見たようにこの動乱の不幸を見た二百万人の人々が前進したら、そしてもし何も把握せず何にも防げなかった抽象的な決まり文句に胡座をかかずに、私のように真の戦争の原因を見分けたならば、確かに物事は別な風に向きを変えたのです。どんな風にででしょうか。私には分かりません。しかし、ドレフュス事件を収拾した首相のヴァルデク＝ルソーのような

人がいなければならなかった時に、確かにロシアのペトログラッドにポアンカレ大統領はいなかったのです。確かにドイツが我が国に尋ねた時、つまり「もしロシアが動いたら、あなた方に何をやるのか？」を尋ねた時、その様な疑問が明白にしているのはそれを書き写しながら私は震えていることで、確かに我が国のスポークスマンは次のように答えていたことです。「戦争も平和も私たち両国にかかっている。私たちは自分たちの裡に感じているこの驚異的力に相応しい者でいよう。そして、何よりも先ず怖がることを怖がらないようにしよう」。しかし、非難して何になるだろう。悲しいかな、事実は事実です。若い友人たちはルクセンブルクへ行って戻って来ません。しかし、生き残っている者たちには、私は冷静に最良の理性を望んでいます。情熱の方向を変えるには屢々、決まり文句で十分です。せめてジョレスがもう一日生きていたならと思います。来るべき危険な時間のために、二百万人がジョレスになろう。特権身分の貴族たちも、そんなに沢山の人を殺さないでしよう。

(完)

或る代議士への手紙
(LETTRE A UN DÉPUTÉ)
1916年4月7日

あなたの再選がかかっていると私は敢えて言わせて戴きますが、重要な市民グループの名においてお手紙を差し上げます。私たちは平和の問題に関わってきました。その他の問題はそれに比べれば大変些末に思えます。そしてこの恐ろしい戦争に対して、私たちが昔議論した中で表明した義務の観念とあなたの義務の観念との相違が小さくなるように私たちが育ててきたのを理解しても、あなたは決して驚かないでしょう。従ってあなたが言うように、私たちの全ての国境が組織されて不可侵にしなければならないと思いつつも、私たちは最早武装化も武装解除も何も言いません。同様に、あなたが平和のための法人組織を率先して行われることも信じております。しかし、私たちの意見は極秘扱いにされて、大いに情熱の赴く儘に外交に取り組むように注意を促すことは有効と思っております。私たちが考えるに、政治家の非常に重要な役割は平和を維持することです。このことを月並みに受け取らないで下さい。というのも大臣たちやあなた自身も、私たちのように理解して聞いていないと私は思っているからです。

ロシアとの同盟は、純粋に防衛的なものであったと多くの人々が言っていました。でもそれは本当でなく、ロシアがオーストリアに対して積極的に兵の動員をかけたので、フランス政府も軍事的に支援する義務を負わされていると思ったのです。恐らく約束するか否かを負わされたのです。しかし、それを約束しなければならなかったのでしょうか。特に、公的な約束を結んで約束をしなければならなかったのでしょうか。多くの人々が公的に主張していることに反対するなら、その様な約束は秘密裏にしか出来なかったと言われているのも本当です。それ故にその同盟を結ぶ必要はありませんでした。そしてあなたは多分、規則を施行したいのであり、先ずは私たちの名前で行われる兵役志願というものを公的に行う大臣の権限しか維持させないことであり、その次は防衛のための同盟で、断じて防衛であることがはっきりと明文化されたものしか認めないことです。恐らく、あなたの演説や信念に一致するものは何もありません。こんな言い方でお許し下さい。熱狂する人々がおります。何時も流血まで行く歴史上の不幸な教訓は、武力だけが維持できた計画に政治家を引っ張って行くことはあり得ます。或る高尚な人物との親密な会談で、私たちは全員が兵役志願する口約束へ引っ張られて行くこともあり得ます。人数の上では弱いが大胆な党派が、過去に見たような脅威、街頭デモ、暴力でさえも、過度な行動によって統治者たちに行使することも最後にはあり得ます。基本的にはそれが洗練された社会になり、その称賛の演説は聴いても大変に快く、その力は野心家や恋人にさえも圧力を感じさせます。国民を代表してあなたが行わなければならないことは、先ずあなたは自分自身から守ることであり、その次には継続して根気良く、必要であるなら疑い深くなって監視し続けることです。賭けられたものはそれだけの価値があります。

そして、終わりに私たちは国家の名誉についての何時もの演説は、もう聞きたくないことをあなたに言います。名誉がかかっていると、もう誰も退却出来ません。しかし、あなたの仕事は基本的諸真理を決して証明することではありません。名誉が義務を負わせないように行うことです。人は何時もそれが出来ないと私たちは言いますし、本来はそこにあなたの仕事と義務があると私たちは言います。そして、それはあなたには侮辱であり、多分最悪なものになっています。しかし、あなたは貴族の称賛か人民の賛同か、選択しなければなりません。その迷いの中に私たちがあなたに思い出させるのは、アカデミー会員の人々に何時も気に入られていないことに存するこの政治は、悪い政治ではないということです。そして迷った場合には、何時もそれに従って行くことを私たちはあなたに要求します。最大の危険や最も耐え難い残酷な災害や惨禍というものの全てに、もう一度注意を払うのは良いことです。

(完)

戦時体制における不平等
(DE L'INÉGALITÉ DANS LE RÉGIME DE GUERRE)
1916年2月3日

貴族には、生まれただけでその後多くの特権があったということを本で読んで、時々びっくりさせられます。しかし将校殿にも、そんな理由も無いのに同じ特権があるのを私は目撃しました。不平等が生じるや否や、力そのものによって悪化することを私はよく考えました。そのことを私はよく考えたのですが、余り信じませんでした。それを体験したのは戦争という最も印象深い授業でした、私としては大変にひどい不平等を受け、それを我慢しました。私は決して不平を言いたくありません、というのも本当の不幸の傍には小さな不幸があったからです。そして、少し顔見知りになると、個人的には大変良くして貰ったことを私は言わねばなりません。しかし、これらのまあまあの関係においても不平等は多くありました。何故なら私がして貰った厚意は、王子に対するような親切であるのは明白であったからです。そして、その様な扱いを受けて立場も強くなり、性格も曲がってきました。私はこの小さな優遇を守るために、大変に悪賢くなり狡くなりました。私としてはその従属は私が信じる以上に遠くへ行くことが出来ません。それが自然なことになり、上手に鉋をかけて平らに削られた板と同じです。人は自分のために、その様な態度を取ることは少なくとも考えません。それは将校殿のためです。

ここにいるのはブラシをかけられようとしている馬たちです。泥だらけで惨めです。長い毛にぴったり付着していて、所々に皮膚がむき出しで、馬具も不足しています。そして哀れさを催させる程に疲れています。幾らか離れた所には、太っていて元気そうで、良く手入れされて輝いている動物たちの小さな群が見えます。砲手は主人を見分けます。それが馬の将校殿です。少尉は両者の中間にいました。しかし、意味のないこの生活において彼は、平凡な水準に戻っていました。行為が全てを決めていました。それは中間段階を消していました。貴族又は賤民だけです。でも小さな者たちも入れて下さい。真の博愛、権力よりも強い友情、行動の中に理性も入れて下さい。しかし、最も小さな将校は、桁外れに高尚なこの世界を凝視します。そこでの彼は異邦人です、黒人奴隷の中の白人のようです。彼が正しいとしても、私はもっと言いに行きました。そして、それはなかなか体験されない結果になります。三十歳の将校が、大変快適に監督する立場を見せながら、四十七歳の上等兵に素直に言いました。「ご覧なさい。あなたのベッドはあそこです。でも私はこのマットレスをあなたに使って貰います。私のものよりも厚いです」。私は何人かの人に満足しています。でもこれらの思い出は余り快いものではありません。

次のように将校が言うのは適切なことです。「ここの防空壕は最も堅固ではない。そこには私が入る」。彼は何も言わずにそこに入るのでしたらもっと良いことです。しかし、私が見たのは何時もその反対です。国民が世論を持つことに最早疑問を抱くしかないまでの下層民にとって、彼は異邦人です。彼は国王です。

(完)

軍隊での不平等は決して真の価値によらない

(L'INÉGALITÉ AUX ARMÉES NE DÉPEND POINT DES VALEURS RÉELLES)

1916年2月4日

私が述べるこの不平等は、決して真の価値というものによるものではありません。何故ならその文化は、勇気という側面で見たら価値が小さくなっているからです。そして、あちこちに英雄がいて、あちこちに臆病者がいて、あちこちに追従者がいることも私は理解していますが、砲弾は決して選びません。しかし、そんなことよりももっと面白い証拠を私は見えています。見習士官は正確に少尉と同じ教養を持つことが出来ます。両者の相違は偶然のものです。私が見たところ見習士官でも学識、本当の礼儀正しさ、勇敢さ、判断力にはっきりと優れていると思われることはあり得ます。しかし、見習士官は神聖なテーブルで食事をしない、と私は将校殿から聞いています。皆が言っていることです。見習士官は下層民で庶民に色分けされます。歩いていても道を退きません。それらの状況が戦う妨げになっても、如何にして不平等さそのものによって壕が掘られ、自らの力で跳ね橋を動かし、封建的な塔を建てたのかを教えてください。領主がよく考えたがっている農奴の地位を経験から知って、私が嬉しいと思ったことは一日ならずありました。「彼は我々のものになるに違いない」。しかし、結局はそうなりません。その思想は明るく照らす照明弾のように昇って来ます。そして、全てが再び闇に落ちて行きます。もしあなたがそれに憤慨しても、それは無駄な時間になります。憤慨は絶えず他人の情熱のために働き、本来の自分の目的に逆行することがたまたまあり、私はそこに戻ります。もし戦争や平和が問題になるのなら、何時もそこに戻ります、何故ならそれは戦争のための戦争になるからです。そして、戦争は二つも三つもなく、その戦争があるだけです。そして何時も大急ぎで情熱が走っています。戦争に反対することは、既に戦争中なのです。私を照らす時間の中で、私は理解しました。最早戦争でなくなるようにこの戦争に参戦しているのである、と言う純真な人が何人いるのか見て下さい。情熱による間違いは、もう先がありません。

有益であるなら、あのことを話さなければなりません。今、議論好きな人が私に言いました、「あなたは家にいることも出来るのに、何故武器を取ったのですか」。もし私が指摘する誤りに私が陥っていたなら、そのことを十分白状します。しかし、少しもそういうことはありません。消防夫がいなくて火を消すバケツを取ったように武器を取ったのです。単純でやむにやまれぬ行動であることをあなたに誓うが、それは大変に独裁的な恐怖に勝ったものであり、それ以来の私は冷静で感情を抑えてきました。もし他の多くの人々も私のように単純で強い動機から行動したと認めたら、彼らは先ずそのことを自分自身で認めて言って欲しいと思います。というのも私は先ず、神々とは無関係なものを犠牲にして人間を立て直したいのであり、それらは〈祖国〉とか〈権利〉とか〈文明〉と呼んでいるものです。というのも人間の両肩には何時も神がいるからです。〈権利〉があるのは勇気があるからで、勇気があるのは権利があるからではないのです。何時も静かに考えて下さい。別の機会にもっと良く説明することにします。

将校殿

(MONSIEUR L'OFFICIER)

1916年2月5日

全員が同じ危険の中にいるから、全員が平等であるというのは本当です。その危険が、軍隊の慣習において存在している不平等を少しは和らげていると信じるのは間違いです。純真で善良な人間が年下の弟と平等であることがよく一緒に引き合いに出されるのを私は見ますが、私が耳にするのは少尉、上等兵そして兵隊たちの平等です。しかし、私が物事を観察出来る時、何時も実際の労働については真の苦しみとの相違や無知さえもその底にあるのが分かりますが、他人の労働には直接眼に見えてはつきりと満足感が結びついて受け入れているのが、びっくりする程容易なのが分かります。例えば、既に大変強固になって閉じ込められた汚らしいシャンパーニュ地方の防空壕の中で、将校殿は白亜の壁を跳び越えて直ぐに一組の馬と馬車と二人の木材労働者を動員して、板を壁に備え付けます。手助け出来るのは彼らと同じ人間であり、あるいは他の人間であっても、地面に眠ります。贅沢はここでは至る所にあり、結果が全てです。しかし、私はくどく言いますが、不平等の証拠と見えるものは、将校殿から聞いたのですが、上官は下の者の意見を決して受け入れないということです。意見の力は二つの組織の内側にしか影響を及ぼしません、そこには外国人女性たちが深く留まっています。優雅な女性は、御者が持っている意見というものに決して関わらないのと全く同じで、もしそれが馬のことであっても同様にに関わりません。最も注目すべきことは、従前の自分が考慮されていないことです。私は百万長者と知り合いになりましたが、彼は志願してから自分の車に乗って自動車運転手として業務しています。直ぐに招集状態に陥りました。彼が運転した大貴族は、戦争前なら大変に渋い味の刺激のある葡萄酒のブローカーになることも出来ました。最も閉鎖された社会においては、甘受させることはそんなにも難しいことではないと理解させてくれます。それはあつという間に行われます。其処にいると女優がレディーになるように、其処にいない者たちと大変な距離を感じます。同様に下士官が将校に成るや否や、彼の中や周りに奇跡が起こります。以上のことは、私にはよく見抜けませんが、殆どルサージュの小説のジル・ブラスが大貴族たちを見るように、私は大変遠くに見ましたし、同時に大変近くにも見たことです。そして、その原因は容易に分かります。権力と議論しないで義務がなければなりませんし、それが基本であり、全てが結ばれています、というのも中尉は將軍に服従するからです。しかし、ここも余所と同様、肉体労働は分けて行われるということです。下士官は馬に大変上手に鞍を置きますが、将校は置きません。戦争という政治的結果、国内制度の変化、それが生じさせる希望、貴族が勝利や敗北からも期待する果実、それらは軍隊で身を立てる封建制度と比べても大したことはありません。習慣は直ぐに変えられますが、全生涯のためです。私が立派な生徒の一人に出会うことがあり、もし彼が将校の服装の儘であったなら、私も領主の前の農民の動作を執ります。服従が顕著です、そしてあわよくば反乱です。農民一揆は、何時も農奴の身分でいるものです。

権力者たちと戦争時体制
(LES POUVOIRS ET LE RÉGIME GUERRIER)

1916年2月7日

私が十分に予想していた貴族的制度を何らかの文書で示したかったのですが、それは厳密でもなく長所でもなく生まれつきの身分、家柄、知性、勇気、知識のことでもありません。その野心は既にかなり自由にあり、更に希望にもなっていると理解されています。私は内面のことを話しているのですが、平凡で小さく、卑しいものも十分そこに支配されていて、如何なる苦勞もありません。

戦争への準備や訓練においても既に、同じ交流や分離が生じているのは自然であると今は考えることです。何故なら平和は武装され、戦争を模倣するからです。報酬や儀式などにそれを感じます。権力者たちは何時もよくそのことを認めていました。従って戦争への脅威は、彼ら自身の利益において権力者たちのための一つの方法になっています。大袈裟な演説、通りでの騒々しさ、同盟、そして貴族主義者たちの変わらない政治のことを考えて下さい。戦争へのリスクは、非常に大きな利益の割には余り高いものに見えません。最も高貴な人々は、過去にやってきたように戦争や彼らの正直な人生で報いてくれます。〈祖国〉や〈彼らの特権〉は、実際には只それだけのものです。フランス軍司令官のカステルノー将軍とその息子たちを認めて下さい、そして尊敬される独裁者は何事にも最も危険であることを忘れないで下さい。

(完)

必然性 (DE LA NÉCESSITÉ) 1916年2月8日

「決して損をしたのでは無い、与えたのだ」という有名な言葉で、母親は息子に栄光を与えることもあります。そのことに関して母親は息子よりも栄光を愛していることはあり得るし、その言葉が立証することもあり得る、という話を私は聞きました。しかし、もっと良く見なければなりません。今は必然性が何よりも優先しているのであり、それが全世界を導いているように、母親と息子を配慮することもなく導いています。それらの言葉は其処では何も変えません。その次に死が襲って来た時、誰もが情熱には情熱を対抗させて、どうにかして自分をよく慰めなければなりません。悪意を持った者たちは全てが計算であると信じていて、可能な利益は全て取り返しがつかない不幸から引き出すことであると言っています。実際に母親が息子をその様にして殆ど喜んで栄光を与えたならば、祖国のためなのか、自分だけの特権のためなのか私には分かりません。彼女も同様に分からないのです。しかし十分確かなことは、彼女が目指しているのは空しい栄光では無いということです。指揮するのに向いていると信じられている家族は、感情的に優れた処を示さなければならないと強く感じているので、危険は皆に等しくあります。ここでは既に情熱というものが一緒になっていて、誰も見分けることが出来ませんし、一人ひとりの行動を測ることも出来ません。

(次章へ続く)

戦争の真の原動力である名誉
(L'HONNEUR, VRAI MOTEUR DES GUERRES)
1916年2月8日

私は既に検討したもう一つの観念について再び取り上げますが、それは自ら結び直すものです。それは名誉という感情が戦争の真の原動力であるということです。そして、確かに世界中の人々はそう言いますが、直ぐに全く別のことも言います。すなわち戦争は利益とか残酷さを齎すとも言っています。従ってこの名誉という感情を新たに調べなければなりませんし、そこから私たちは如何に巨大かを理解し、そして恐るべき行為は貴族精神が生き生きとした限られた集団によって行われるかもしれないのです。彼らは先ず行動します、何故なら軽蔑と分離という高所から、彼らは称賛や慇懃無礼や注意力にさえ最高の栄誉を与えるのを覚えたからです。それは少なくとも道徳的力によって管理する技術であり、その研究は不十分です。私が見る処、この十年間という期間は、私たちを戦争へ導いたのであり、取分け選挙はポワンカレ、投票は三年兵役制、裁判はカイヨーに示されたように、公的力に対して私的力の華々しい勝利が記されました。

しかし、彼らと共に共通意見もなければ共通利益もない市民たちの対して、彼らが如何に行動しているのかも言わねばなりません。彼らは敏感な点を踏みながら行動します。この名誉という感情を刺激して、自然と大変力強く最も下劣な人間がよく或る種の名誉を口に出しますし、或る場面では真実ですが、何時も名誉を口に出して言っています。

アメリカの平和主義者フォードが旅行中に発見したことは、戦争延長の主要な原因はお互いの国が自国のために死ぬという高貴な願望にあったことでした。そこには最も重要な観念がありますが、誰も余り気付いておりません。その平和主義者もスペインと自国の戦争のことを考えながら、旅行しなくても断固たる志願者が沢山いることを発見出来たことです。彼は少なくとも断固たる志願者のことを考えながら見つけたのでしょう。動機が弱いために、臆病者は自分ではないと納得させながら、二人の人間をお互いに戦わせることも出来ます。決闘のあった良き時代の純粹で単純な挑発が、戦争というものの本質を見えるようにさせていました。つまり情熱による純粹なゲームであり、如何なる公正な現実的利益もありません。

死の競争
(COURSE A LA MORT)
1916年2月10日

若者全員による死の競争は、最も重大な戦争の出来事で、確かに偽善ではありません。そこでは何時も注意力を働かす必要があります。只単に、必然性に身を任せるばかりでなく、彼らは前へ走ります。待つことからもっと早く自由になるためにギロチン台へ走るかもしれませんし、辛抱出来ずに自殺することや死ぬことを恐れることもあり得ると直ぐに言いましょう。模倣も考慮に入れましょう。好奇心も入れましょう。しかし、それらは二次的な原動力です。話をしているのは名誉であり、名誉に執着する以上に更に苦しくて刺激的な情熱は決してありません。恐らくその種の男性の裡には、愛の情熱についても同じ歩みを持っていて、自発的に死へ導くこともあり得ます。もしこの考え方が余りに古くて作家たちにも有名であっても、あなたには馴染みが無いのなら楽しい時を本に委ねて下さい。スタンダールの『赤と黒』を勉強して下さい。何故ならそれは、私たちが先ず真実の人間を知ろうとする目的のためには大変重要であるからです。愚かにも多くの思いつきの道徳主義者たちと共に自己保存本能が何よりも一番強いと仮定するなら、監獄の中のように、余儀なく私たちを忙殺する問題に向きが変わるのです。

(完)

名誉の力
(PUISSANCE DE L'HONNEUR)
1916年2月13日

コルネイユの悲劇「ル・シッド」のように家族の名誉を必死に守る息子を想像して下さい。彼は危険へ猛然と突進します。名誉は決して貴族階級の特権ではありません。そして、貴族の言葉は出生とは無関係の美德の言葉になります。この点をよく注意して下さい。名誉が関係してくる外部的事件は、教育、環境、職業と共に変わります。しかし、名誉という感情は何時も同じです。そして、それは次の独り言に尽きます。「私は臆病と見做されているが、私には我慢出来ることである」。しかし、心の中はそれ以上です。「私は臆病だ。悪意ある理由であっても私は空しいが満足している。実際に恐怖に負けている。私はそのことを分かっている。皆が知らなくても私は知っている」。この棘と一緒に、酔っていないならばベッドの中で眠れる人は少ないです。そして、そこにあるのは棘そのものを凝縮させた好戦的情熱と城砦の中の足場です。私が言えんとするなら、先ずここで軍人を自覚して下さい。敵の力とあなたが持っている尊敬の念を判断して下さい。私はその点に戻ります。敬意を欠いた人々を大変軽蔑すると私は直ぐに言いますが、そういう人は見付かりませんでした。そこから本当の困難がやってきます。その点にあなたの精神を向けて下さい。あなたを酔わせたがっていること、国益、野蛮人の脅威、抗い難い必然性を無視して下さい。問題は私があなたに言っているそこにあります。平和とか戦争の全てが、錠前屋や店員や教授の心の中の名誉と反応することにあります。国の名誉は大変に抽象的で、その上弱いものです。戦火から遠くにいる者の眼にしか威光はありません。戦争体験は精神を洗ってきれいにしてくれますし、真の原動力を発見します。というのも何週間もの間、戦火の下や泥の中にいる人間は、言葉で満足するようになっていないからです。

名誉を殺すことは誰も考えません。そして困難なことは戦争の苦難に引っ張られること無くそのことを称賛することで、それは英雄たちを暴くのと同時に殺します。あなたは申し分なく名誉を称賛し、戦火の苦難を受けずにそのことを認める理性的な人になり、可能である限り結局のところ外国人の目的のために利用されたり興奮させられたりするのを阻止することがあなたの仕事なのです。

(完)

情熱というものによって更に強くなり糧になる憎しみ

(LA HAINE, COMME ELLE SE NOURRIT ET SE RENFORCE DE TOUTES LES AUTRES
PASSIONS)

1916年2月14日

もっと直ぐに好戦的情熱を検討する前に、私はその憎しみよりも尊敬すべきものでもないその情熱の検討を続けて追わなければなりません、嘘つきになることが大変よくあります。私は他国に対する国家の憎悪、復讐心、そして許すことも忘れることも決してないことの誓いを、尊敬すべきものではなく疑うべきものの仲間にとらしめています。確かにそれらは情熱です。私は激しい怒りに取り憑かれるまでになっている人を一人ならず見ましたが、確かに偽善からではありません。けれども私が思うに彼らには情熱が隠されています。政治的情熱がそこで多くのものに賛成していて、商人がドイツとの競争によって破産される時のように屢々物質的利益であったり、不誠実で卑怯な国民、下品で粗野な国民、重苦しくて醜く緻密でない等の対象となる人々を激しく告発しているのだと私は思います。あなたはその繰り返しを認識します。何の中にでも本物と偽物があります。私は完璧な仕上げで整えられたドイツの印の入った光学器械を見ましたが、優雅でなくはありませんでした。しかし競争の中身は私たちには興味を惹きませんでした。原因と結果の間には不均衡があると少なくとも私は理解しています。人間を殺したいと思うのは人間ではありません、何故なら人間は美味しくないからです。商人が幸せな競争相手を殺すことを考えるのは平凡なことと同じではありません。しかし、この大変に子供っぽい怒りは別の者たちが加わって更に強くなります。それは一方では屢々活発さを支えるものと、他方では大変に怠惰なものが混じり合った情熱の属性となっているものです。その商人は歴史の学習や彼自身に対して、大国の義務について大袈裟に言うでしょう。しかし、私は個人的失望がそこに混じり合い感動的になるまで議論を生き生きと彩っているのか疑っています。もしその人がそのことと一緒に少し病気であるなら、そこにいるのは言葉だけの弁士です。胃から来る苦味は、自分で同意する機会を失いません。そして実際の情熱は色々と非常に異なりますけれども、言葉に同意する人々であると私はよく理解しています。そのために何が行われるのでしょうか。一人ひとりの隠された動機を見分けることであり、もっと正確に言うなら自分自身を創ることであり、結局のところ表面上の満場一致を殲滅することであり、謙虚な人間の最初の瞬間を大変に力強いものにするのです。

私としては情熱というこの純真さを理解する前に、熱狂者は自分自身をそこで間違えるようになり、本心からと私が理解したこの憎しみを私は理解することが出来ませんでしたし、未知の人々でした。今私が嘗てない程信じていることは、良く知っている人々しか実際は憎まれず、そして良く理解されるということです。しかし、失敗したとか病気になったとかしている哀れな人というものは容易に憎しみを口に出して翻訳するように言い直しているのも私は知っていますし、最も弱い状況で最初の対象にくっつきます。その時判断されることは、罵倒や不満が決まり文句になっていますが、一般的に尊敬され褒められている憎しみが、不平を言う人々全ての宗教とならないか否かです。それは陰鬱な人が政府と対立するようになるのと全く同じやり方です。それらの注目すべきことは大変に通俗であり、常識的であるということです。しかし、あなたは現在お持ちのものに慣れて下さい。それらはあなたが孤独に耐え、それを理解する助けになります。もしその勢力範囲を全て把握していなかったならば、直ぐに悲しくなり打ちひしがれて、結局は大袈裟に言う人々の中でよそ者の異邦人になっているでしょう。

(完)

戦争に関する世論
(DES OPINIONS DE GUERRE)
1916年2月15日

平凡なことには大変に冷淡で、或る種の奇跡として長い月数の雄々しさを崇拜している男がここにあります。私は彼に本当に信じていることを言いました、すなわち人間は既に昔から同じでしたし、長い平和によって柔軟で臆病で墮落したと信じた者たちは間違った判断をしていたのです。しかし、私が話をしている人の顔は疑念を表しています。彼は何時も歌う歌が分かりません。懇願者の前では金持ちのように冷淡です。何故でしょうか。彼の考えには多くの隠された部分があり、恐らく真実というものが危険であるという考えなのです。このヒロイズムは、自由と正義に奉仕するには有益になり得ると私は説明しますし、言い続けます。しかし、如何にして私がそのことを理解しているのかを彼は知りたいのです。私が愛していた戦争は確かに流血が全然無く、私たちの裡にある暴君に反対し、心の中の敵に反対する戦いでことを彼は見抜いています。それは閉じられたものです。彼がもっと愛しているのは、私たちが今行っていることよりも長く暗いこの回り道によって正義へ行くことです。何時もの観念に従ってその社会主義者は戦争の敵になり、従って彼の正義に相容れないものなのです。彼はそこから抜け出ません。〈正義〉という外部の敵が戦わない限り、如何なる内部の正義に私たちは期待出来るのでしょうか、等々です。私は彼の偏見には何も出来ません。しかし、読者であるあなたはそのことを知って聞いており、あなたの観察に対しては何も出来ないのでしょうか。

その点については共通意見があることを私ははっきりと理解しています。公的談話は全てが似ています。イギリスもフランスもロシアもイタリアも全ての同盟国が五十年前から未開の国の実現を唯一防止している正義という理想に基づいて統一されていると言わねばなりませんし、信じなければなりません。思考というものは、私たちが子供の時にミサで歌っていた〈使徒信経〉よりも決定的なものを見出さない教義へ敢えて向かいます。それらに関心を持つことが利益になると信じなければなりません。しかし、それらの見通しには曖昧な処もあります。最も権威のある社会主義者たちは、ここでは他者と結びついています。私は今、何ものかが私の手から落ちるのを告白しなければなりません。もし政治家だけしか重要でなかったなら、彼らは偉大なる喜劇俳優であると私は言います。しかし、同じことを言った労働者は一人ならずおりましたし、フランスとロシアに共通したこの理想のために彼は感動をもって自殺させられず。それに精神が加わります。しかし、しっかりしていなければなりませんし、今は情熱という隠された働きを見抜かねばなりません。恐らく、二つの必然性の間、つまり死刑によって気取ることなく現れる外部からの義務と、私が描きたかった名誉という高慢な感情によって同じ目的へ行く内部からの義務の二つの必然性の間には、多分何と呼んで良いか分からない絶望へ向かう性癖として懐疑がないのは明らかで、危険よりも悪く、死よりも悪いものです。その受刑者は自分自身で目隠しをします。死に行くこの人間に私は何を言わねばならないのでしょうか。砲火を浴びる限り、沈黙しなければならぬと私はよく感じました。この長い沈黙に後悔はありません。各々の理由があつてやらねばなりませんでした。しかし、その沈黙は何時も長く続く筈がありません。

精神は、望んでいることを信じるまでに、自然と弱くなります。そうです、理性から逸れるかもしれません。理性を恐れるかもしれません。聞くのを拒むかもしれません。思考というものの中には率直さがあり、思っていない程多くあります。犠牲に代わって武装した率直さを私は大変に尊重しました。私が最も親しかった友人の一人は、怒りが全てであるような言葉を手紙に書いて寄こしました、1914年の夏頃でした。私は彼から武器を取り上げたくありませんでした。彼は気高く死ぬのを望みました、そして立派にやっつてのけました。私は彼に相応しかった覚悟を心に持っているのでしょうか。いいえ、持っていません。しかし、私も平和を取り戻し、持ち続けたい人々のために書いているのです。今は最早、死ぬことが重要ではなく、生きることが重要

です。そして、それは識別力と見ることによる仕事です。勿論、それは教義を剣のように研いで磨きをかける以上に美しいものではありません。従って自ら殺されたいと思う人々に私は何も言うべきではありません。戦争は美しく正しいと思っている人々にも、私は何も言うべきではありません。私はその点については決して論証しません。私は五十万人の若者の生活を救済するために、上手く行うことが出来ると自問している平和を望む人に話します。そして、私が出来る範囲で彼に示す悪は、服従への願望、精神の怠惰、美しい外観による何らかの間違った心遣いによって生まれるかも知れないのです。

(完)

正式見解への心遣い
(DE LA COMPLAISANCE AUX OPINIONS OFFICIELLES)
1916年2月16日

無分別な意志や怠惰から少なくとも二枚舌の人々を私が想定しているとあなたは言うが、それは侮辱であり、決してそうではありません。不快な病は多くの若者を殺す苦痛よりも大変に小さいと先ず言いましょう、そして恐らく平和は、眠っている人々にとっては或る種の戦争に入れることは出来ないが、眠っている人々には平和は冷酷です。皆が一致している話には心遣いとか間違ひが多くあるに違いない、と私はつけ加えて言います。決して武装しない人々は屢々、他の誰よりも毅然としていて、特に敵への罵詈雑言や変わる事のない憎悪を宣誓していることを私は既に気付いていましたし、あなたも私のように気付いているに違ひありません。しかし、それは彼らの心の奥底を余り占有すべきではありません、というのも関心が低いことが力を守り、身近な不幸を脱した平凡な生活が喜びに結び付き、結局のところ戦争は、決してそれを容認しない人々の思考を悲しくさせることが殆どない恐れがあるのも明白であるからです。私が話をしている思考は、彼らの表面上に留まっているのがその証拠であり、彼らは実際に決してそれらを形あるものにしません。彼らはそれと知らずに喜劇役者になるのであり、以上は私が認めていることの全てです。

今は政府見解を吟味しましょう。私は政治の細部に立ち入りたくありませんし、政治は何時も疑われています。私の考えによれば、我が国の政府又は殆ど全ての政府は何時も二股をかけていましたし、今は何時も困難な状況の中で平和を維持しようと努めています。軽率な演説に溺れることも大変によくあり、あるいは用心せずに交渉したりして、些細な部分でもこの戦争の責任を取ることは一瞬たりとも考えるまでになっていません。そして、それは十分に普通のことです。「私は正義が死んだことに関しては無罪だ」。この考えは彼らには大切です。それは彼らにはよく慣れ親しんだ雰囲気です。そして、他の者たちも同じです。「私はそれを決して望まなかった」。皇帝は戦場の墓で祈った後にそう言います。私はその中で犯人捜しをしているのではありません。その確信の中で最も弱い理性が威嚇する武器のように、彼らの味方になると理解すれば十分です。彼らは次から次に守りに入ります。従って公式見解はここでは全力で拒絶されて検討し調査されても取るに足りないものとなり、懷疑は少しも意味が無くなります。もっと正確に言うなら、戦争は計画的に望まれていました。オーストリアは口実でしかなく、後は推して知るべしです。私はこの意見が支持し得るのか否か調べませんが、少なくとも私が理解していることは、この意見は国家の犠牲へ、残酷な国民へ、文明及び権利へ導いていることです。あなたはそれらのことを気楽に言います。でも人々はそれらのことをかなり見聞きしているのです。

ところで正式見解は大変に力があるものです。何故なら先ずそれは基本的に証拠となるからで、何時も市民よりももっと良く知っていると思倣されているからです。同様に、単に新聞に書かれるばかりでなく、これらの悲しい日々の中で公務員を含む国民全体がプルードンの有名な言葉を十分に吟味していたからです。「しかるべき場所の人間の思考が、その人の俸給である」。ここで私にショックを与えていることは、何時も同じ言葉によってそれを支えている閉鎖的で頑固なやり方で、意見自体がないことであり、聞こうとしないことです。あなたは少なくとも平和への熱意が国境を越えて存在していることを言おうとする時、私は最初の瞬間には殺されないように更に繰り返して言います。それは推測ですが、それなくしては皆殺しの戦争を除いて、平和という友人たちのための如何なる希望も無いのですが、行為の中よりも更に言葉の中の方が容易なのです。

(完)

服従する義務
(DU DEVOIR D'OBÉISSANCE)
1916年2月19日

避けられない戦争、ドイツ人の精神状態、民族闘争、その他の根も葉もない愚行についての習慣的な進展を穏やかな言葉であっても反対するや否や、人々は気難しくなり、余りに醜い怒りを表しますが、そこには節度ある一定量の怒りに陥るようには私には見え、そこで聞くものと同じ観念的な恥の始まりも十分に真実になり得て、そのことを考えざるを得なくなりますが、結局のところ私にはそのことを考えるのは余りに遅いように思われます。彼らはむき出しの力による組織的な方法に従ってあなたの気力を失わせる観念と共に、あなたに対して戦を挑みます。「私はあなたのようなアナキストに驚きます、等々」。或る種の毒矢に対して、私は次のように言いたいのです。如何なる集団の名前も、如何なる計画名も話しません。如何なる信仰告白によっても決して結ばれません。私が話すとか書いたりした限り、法律や権力者たちへの服従は厳格な義務であったことを言うのを決して止めませんでした。そして、特に軍隊では個人的な服従は何時も容易であったと私はつけ加えて言います。何故なら命令は正確で、必ず期限があったからです。従って命令は私に翼を与え、恐怖は逃げて行きました。私が教師で色々な所へ行った時は、一度ならずよく恐い目に遭いました。一つの命令が私に命じられると、私には殆ど恐怖はありません。慎重さ、洞察力、果敢で指揮する精神が、行うべき行動のことを考えて直ぐに齎されました。そのことは私が思想的にも本質的にもアナキストでないと認識させてくれるものですが、寧ろ私は良き市民、良き兵士のように思えますし、法律や命令に関して悪知恵を働かせる精神はありません。この美德は珍しくなく、私には何時ものことです。私がこの様なことを言う度に話をしていた相手は、悲しげに黙り込んで自分の中に閉じ込もって仕舞い、それから話が飛んで仕舞ったのを見ました。あゝ、偏見と情熱の力よ。勿論、私の読者であるあなたはもう私の前にいないが、あなたという人間の矢は私を射したりしないし、あなたは人の声やあなたの声で最早動かされません。この本も決してあなたを押しやりしませんし、待っています。理性的であって下さい。大きな義務があることを考えて下さい、僅かな知恵が無視される不幸のことを考えて下さい。もしあなたが只、言葉のために猛然と戦場へ出発したとしたら、戦場全体の真実は雨や霧のように避けられないことを考えてみて下さい。

今はよく理解して下さい。従うことは、信じることではありません。従うこととは、信じないという権利を与えるのです。人は信じなければ悪意を抱いて従うことを、あなたは何かを挙げて反論したがっています。でも何故でしょうか。あなたが仮定して強く主張しているのは何時も野蛮です。過去の時代の悪は従うことではなく、精神的に従ったことなのです。少なくともソクラテスやモンテーニュやガリレイやデカルトにおける精神は決して従いませんでした。少なくともあなたの調整の基で判断力があなたの中で行使され、理性によって行われるのであって、命令を受けながら行うものではありません。あるいは強制や情熱による賭けに身を委ねるのでしょうか。しかし、只説得させたり納得させたりしたいと思う人に対しての怒りは、何処からやって来るのでしょうか。そのことをあなたが考えるや否や、大変に早くあなたが精神に向かう義務や十分に鎖に繋がれた理性によっては、予期し得ない力を感じるようになります。私としてはあなたによく考えて貰います。私のなすべきことは全て私の可能性であり、五十万人の若者の数年間の人生を失わないためであり、それは私が思考するのを明確に示すことになります。私にそれが役立つのは僅かなものですが、試すことは出来ます。評判や自由やあらゆることを重んじないで、忠実な兵士として戦争に反対する戦争の中で、少なくとも正義を目指すことに専心しながら、方法として弱いと見做さないで試さなければなりません。

(完)

党派
(DES PARTIS)
1916年5月9日

少なくともあらゆる意見を一人ひとりに与え、利益に一致していると言うのに賛成であったとしても、私は党派のことを何も書きませんでした。それは周知のことです。しかし、もっと正確に言うべきことがあります。私を驚かすことは、利益がなく、隠された情熱さえもなく、人々が何時も容易に味方や敵になることです。情熱は偏見の中に充満しています。幸福はその反対を言うことであり、それを憎むことにあります。しかし、その主張は殆ど重要ではありません。私は、大した理由も無く政党に加わった多くの人を見ました。例えばイギリス軍の味方になることで、その理由は只単にイギリス軍を見て、見知らぬ人と話すことです。敵になるのも同じです。しかし、如何なる偏見であろうと、人はそれに嵌まり込み道理を見出します。賭けに強くなるようなものです。何時も情熱を持っていることが最大の証です。雄弁で罵倒を好む人が党派を作ります。

私はその上で或る奇妙な性格の人々を観察しましたが、彼らはその他のことも色々私に理解させてくれました。彼らは取分け退屈すると党派を一方から他方へ移ります。「ここはもっと上手く罵っている」。頑固ですが同時に変わり易いです。その段階には狂気が粒になっています。しかし、私は人間という動物に何時も非常に明白なその特徴を度々見付けます。世論という賭けが大変にそれを面白くさせます。議論の熱気の中に、私は凝縮された戦争を見ます。世論が不安定で如何なる場合に考えを形作り、それらを愛するのは如何なる意味があるのかを理解したいのなら、宗教の宗派は注視するのに役立ちます。人々は武器を取るように如何なる世論でも構わずに受け入れると私は時々言うことにしています。

未だ若いが大変に教養ある軍人は、激しい怒りと純真な矛盾によって私を教えました。それ自体が戦場での問題ですが、もし私が服従する義務の問題を偶然に彼に話したなら、彼は力強く答えるでしょう、「私は將軍のピストルが私を強制しているから服従している」。よく聞く平凡な答えです、殆ど何時も聞きます。その点について私の答えは殆ど一つだけであると気付き、大変にびっくりしていました。というのも彼らの行為は少なくとも私のものと同じ位に意味があり、彼らの言葉とも矛盾していたからです。しかし、待って下さい。私が彼に言った時、1916年の春に可能な限りの節度というものを持ったこの国の若者は、多分怖がることなく考えることが出来て、好意さえ持っていて、大変に正確で公的な平和を与えるこの若者は、それ故に直ちに私に逆上して大変に生き生きしていました。まるでドイツを粉碎するか殺すのを自分自身に宣誓していたかのようなのでした。この例は他のことも明らかにしていました。そして、以下はそのことを私が如何に解釈したかです。

私の考えでは、先ずこれはショックを与える内容ではないと思います。そうです、これはその様なものとしての考えです。いわば自ら提案し、武器を見せて精神的襲撃に向かう考えです。私は、不幸にも立場上勢いよく前進して屢々、警戒される前に占領する考えを持っています。多分、困った出来事は既に起きていました。警戒していました。部隊は戦闘準備が出来て、防衛体制が取られました。私には賢明なものが何か分かりますが、手に負えません。それ故に大いに考慮に値する或る種の羞恥心があり、そして不幸な結果も幾つかあります。何故なら放って置かれる危険がある一人ひとりの強い理性は、心に触れた精神というものの中にある愚かさの印になっているからです。一人ひとりの残忍なこの防衛精神は十分に語られませんでした。そして私は、同意している人々が理解出来ない一言に答えるために、滑稽に突進して行くのにも気付いていました。意見を表明するために、決して何も変えないことから成るこの政治が齎すのもそこからです。それは人を苛々させる愚かな様相を与えますし、ついには党派を決定して仕舞います。この奇妙な反動がなければ、党派は全く何ものでもないとは私は思うばかりです。

そこから私なりに結論付けることは、偏見が或る意味では恐るべきものであるが、別の意味では非常に弱くするものであり、思考のために最早言葉に出して言わなくなるや否や、同様にその土地が慎重にきれいにさせられる前に、強力である証拠を余り前へ推し進めない戦術的な技法に到るや否や、打ち負かすことも容易になります。しかし私は、読者であるあなたに私の策略を余り知らせたくありません。

(完)

大地とあらゆるものの平和
(PAIX SUR LA TERRE ET SUR TOUTES CHOSES)
1916年2月17日

私が話した公式見解について、それらは平和の状態において、権力になり得る脅威や戦争の原因になるのは明白です。何故ならそれらは伝統の力を持っているからです、そこから我が国では或る種の怒りが生じ、純真で弱い人の裡では恐怖が生じます、そしてその外の国民の裡ではそれらを罵る作家たちというものが芸術と共に尊敬されているのを見ながら、大変自然に辛抱出来ないものが生じています。彼らの感情から美しい顔までを混合したものやその始まりが認識されると、それらの状況によって一人ひとりは何かに抵抗します。しかし、それは非宗教的な自由な精神で、少なくとも打ち勝つのは自由な精神です。その点で最も致命的な間違いの一つは、平和を保障することによって平和への大きな愛が終焉すると信じていることです。私たちが大金を支払ったのは間違いであり、それは情熱を信用していることにあります。戦争のことを考えるや否や、想像力にとっても非常に耐え難いが、その和合は更に大変容易に行われ、非常に多くの人々を加えてその感情の力はすっかり安心させて、そして人々は最早些細な原因の結合に関わらなくなり、同時に、信頼出来る活動としての戦争に駆り立てるのです。感情は特に他人に決して反対しないことに十分気付いて下さい。しかし、駄目です、気付いていません。一人の激しい感情は、他の人に移ります。平和を愛すれば愛する程、戦争を愛していることを疑われる人々は憎まれます。例えば、恐怖や憎悪でさえも利用する巧妙さについての理論は、偽善を基とした結果として手に入れることはありません、というのも毒を研究する化学者を毒殺者と見倣さないからで、平和的感情からの暴力に反対しますし、憎しみは反抗的な愛の別な様相でしかなく、〈そして、そこには火ぶたが切られた戦争があります〉。最高の結果であり、そして上手に導かれた感情の分析として最良であるのは、憎しみを鎮めることです。でもここで過ちを犯さないで下さい。モーリス・バレスの散文を研究すると、悲しいかな私は多く見たのですが、戦死者の人数が数えられや否や、彼を憎まないのは非常に難しいのです。しかし、この憎しみは何も齎さないと言うのでは言い足りません。その憎しみも平和主義者たちが大変敏捷に行った回り道によって、直接戦争を推し進めています。戦争のための戦争は、何時も戦争です。いいえ、違います。寧ろ戦争やあらゆるもの上には、光のような平和精神があります。しかし、全体的には何か精神的弱さがあり、彼らの思考は直ぐにひっくり返されました。「野蛮人にかかれ。ドイツを粉碎しない限り国家間に決して権利はないのだ」。農奴精神であり、情熱の道具です。弁護士精神は、明白な理性を大変容易に見出します。私の精神は明らかではなく、最高の純真さが眼を閉じてそれらを飲み込んでいるのをあなたは見ません。反対に見過ごされます。その人は顔をしかめ、夢中です。それは真の学問の印になりますが、先ずはその精神は拒絶されます。そして、それを理解するのを難しくさせているのは、まさしくその精神にしがみついているためなのです。

(完)

雄弁術
(DES DÉCLAMATIONS)
1916年2月18日

恐らく、憎まないことは難しいです。しかし、情熱そのものを支配しなければならないことなく、好戦的力を効果的に妨げられると信じるのも可笑しなものです。戦争は自然な出来事です、つまり後方に思考を引っ張って行く自然発生的な活動です。気持ちの良い感情で、一般的に称賛された厳しい規律によって坩堝の中の一つの原子が可能である限り、人々は戦争を防げます。それは小さな仕事でないのは確かですが、その時はあなたが戦争に対して、百回以上もあなたの中で戦争を行う同盟国に対して、直接戦っているのです。何故なら、あなたは指の下に怪物を感じることなく、平和主義者たちのやり方で根拠もなくあてもなく空中を狙っているからです。ですから我々は訓練しましょう。好戦的な勇ましい演説において、勇気の中に自分の気持ちを隠して臆病者である金持ちや権力者たちに腹を立てている怒りが私にはあります。その時は最も遠くにいる敵に立ち向かっているのです。殺される危険は遠いが、非難される危険が近いということです。私は最悪と思いました。公務員が最高に割の良い世論に貪るように身を投じないのを見ながら、私は詰まらないやくざ者の顔に或る種の憤慨をひけらかしているのを見ました。しかし、決してその点について余り眼を向ける必要はありません。確かに、私が語りたかったこれらのこんがらかせる感情というものに彼は英雄としての賛嘆の一部を理解しますが、それは手助けするために野営の下僕たちを武装させられる特別許可のようなものに似ていて全員を再び掻き立てます。弱者たちの気持ちをもう一度もっと元気にさせる感情であり、恐怖に勝つことが出来るのを見て全員が再び掻き立てられて、大変に強くなりますし、トロイア戦争で活躍したアキレウスでもヘラクレスでもなく、あるいはサーベルで戦う人でもなく、ネクタイの商人でも店員でも植木屋でも構わないのです。私はこの感情を愛します。それは病気を齎す哀れさと敏捷に戦います。恐怖の中でも何か月も長く生きられるこの動物的な勇敢さを、火の中でも生きられるという山椒魚のようであると見倣すのを私は愛します。しかし結局のところ、この気高い感情は背後や道の上の何処にでもいる鶏泥棒やくざ者の連中をうまく分散させねばなりません。そうです、今は感情を抑えなければなりませんし、激しい快樂を自分に禁じなければなりません。というのも感心して幸福になるのも大変に高く付くからで、それは既に他人の人生であるからです。大変に臆病な食道楽です。

この教えに従って私は勇敢で泥だらけのこれらの人間の集団を放って置きますが、彼らはホメロスが夢見ることが出来たものよりも偉大です（何故なら彼らはもう神が逃亡させたと言うことが出来ませんし、最早彼らは逃亡出来ませんし、決して彼らは逃亡しないからです）。私は気高くもない自然に戻り、大変に危険ですが恐らく1914年8月1日の不幸の開戦の日を知ることもないのですが、大変に早く主張を変えた機会を考える人々の処へ戻ります。

マケドニアの王アミュンタスは、アメリカ人たちがそっくり模倣したと言われていますが、正義や権利のような抽象的観念から非常に遠く離れて、生活の哲学を作り出しました。勿論、誰かがもし自分で組織した力は権利があり、そしてあらゆる権利があると考えるようになったとしたなら、それは彼でした。彼がはっきりと表現した原則を代表して、ベルギーや北フランスを通っている百万人の人々に影響を与えている実際の戦争の原因に抗議することを期待しませんでした。しかし、彼は雄弁に抗議しました。それはイスラエルの最初の王サウルが見たような空想か改宗でしょうか、あるいは世界中に見られるように話をしない恐怖に負けたのでしょうか。「しかるべき処にいる人間の思想はその取り扱いである」。それを繰り返さねばなりません。

更にもっと悲しいことがあります。絶対権力の理論家たちは、強い国民や強者の法律に基づいて大変に力強い逆説の本を出版します。それ故に彼らは敵の中に或る種の規範を見分けに行きましたし、大変に急を要するこの例によって、イデオロギーのない国民を元気づけに行きました。

しかし、全くそうではありません。彼らは原則のために泣き言を言っていました。これの哀れな思考には、決して深味がなく瞑想もなく力もないことは私には分かります。彼らは都合の良い思想家であり、厳格なホッブスや『リヴァイアサン』の理念を下手に模倣していたのです。

(完)

言葉と行動
(LES PAROLES ET LES ACTIONS)
1916年4月6日

感嘆は殆ど全てが、私には体験すると気持ちが良い感情です。そして、私は不幸な時でも或る種の相殺されるものをそこに発見しました。しかしながらこの感嘆する喜びが、最も素晴らしいものは消えて仕舞ったと考えることによって、何時も運が良かったと言わねばなりません。でもそのことはその儘にして置きましょう。私が大変生き生きと感じているこの感嘆は、勇気ある行動と向かい合う言葉しかない人の言葉と結びつくまでは決して行かないと私はここで言いたいのです。大袈裟に言うのは大変に容易です。それは弱者たちの唯一の喜びである、と人々が言うのは何のことでしょうか。それ故に弱者たちはそれを身に付けます。しかし、それが下劣な喜びであると言うことを私は少しも構いません。何ですって。老人や女性や子供たちは、何のリスクも無くその様にして劇場のヒロイズムを自分に与えるのでしょうか。そして、お金を払うのは別の人々です。ですから正しい判断として話だけの感嘆は拒まなければなりません。私が考える英雄は、そんなにも沢山の約束をしませんでした。彼は感嘆されることにそんなにも執着しません。彼は少なくとも何よりも先ず自分自身で自分を評価したいのです。決して自分に術策を許しませんし、如何なる喜劇も許しません。彼は恐怖を見分けます。恐怖に負ける時と負けない時を知ります。話をして行動しないことは、彼の見る処、二重の間違いです。私は、精神的が安定していて健康で、最早約束をしないでいるこの様な人間を愛しますし、沢山知り合いました。彼らの話には癖のない謙遜があり、自由な行動には全く簡単な慎重さがあって、私は感嘆すら覚えま

すし、二つの事柄は何時も本当の勇気を私に教えてくれているように見えます。今、私は活発な血筋で大袈裟な演説家を許しますが、その行動は後を引きません。彼は簡単に言えば、それに大金を支払います。しかし、病身の者のことを考えることや彼が示している勇気とは何でしょうか。私は皆が至福になって欲しいし、感嘆する幸福と模倣する欲望は彼にあっては同情よりも強いと思いたいのです。従って私は彼を厭らしいと見做しませんが、単に滑稽なだけです。そこから私は体の調子が良い者たちが持っている義務を、弱者や病人たちに思い出させます。そして、もし老人が最早人生に執着しないと考えたなら、大変に寛大な人の人生をその中に与えて感嘆と高貴さを感じようとするのは正しいのでしょうか。私としては、彼が滑稽と感じて欲しいのです。

私はここで良い点を大いに強調しなければなりません。それは熟考する時を手に入れる方法です。私が正しい判断をすると信じた女性は、針金で巻かれた死体のことを多く考えていた平和という友人に反論しました。要するに実際の現実的な思想です。私は、この主題においては主要の思想のように見えます。ところでこの女性は、怪物というものは鞭で打たれるに値すると言いませんでした。「戦争にあっては、人間を殺すのは認識の基礎となる原理である」。いいえ、違います。でも彼女は、平和が善の中で一番ではなかったと言いながら、名誉が人生よりも尊いように見えたことを最も的確に論証しましたし、自由も同じことでした。私がよく理解する議論は確かに大変良く私の心を打ちます。しかし、私が正しい解答と認めるのは、その中に少し残酷な処を含んでいます。そして、私は彼女に言いました。「これらの善の全てをあなたが持ち続けるために、あなたにとって今は他人の人生を犠牲にしていることが問題であることを忘れないで下さい。この様に問題を捉えて下さい。他にはありません」。そうです。人生に危険を負っている者だけが、名誉が掛かっているかどうか調べているのであり、その点を気にしないその他の人々は、反対に事物を調べているのであり、彼らがもし黙っていたいなら、それは人が定めている善を少なくして、手に入れる価値を増やす方法なのです。最も高価な財産を保有するためであっても、先ず自分のものを手に入れるとしても他人の人生を賭ける権利は無いということを私は言います。そして結局のところ、とことん考えるならば、戦争と平和の事柄については女性も子供も老人たいも、言うには及ばない風習の中で行われることは十分にあり得ます。品の良さの問題

です。立派な英雄たちを感嘆して見て、彼らを愛すると同時に心から望むのは容易ですから、大変に貴重な人生を保つことです。

そして、もし私の計画が導いてくれなかったら、中身が何であっても多分非常に腹を立てて苛々してこの頁を書くことはないでしょう。二つの戦いがあります。想像力による戦いは、自分が与える感情によって容易に気に入りますが、実際の戦いはその場になればあなたは選択の余地がありません。そして私は想像力の中の戦いは他人を導くことを説明しました。それ故に滑稽という明敏な感情によって、余りに快い想像力による遊びは台無しにしなければなりません。そして私は、機会ある毎に人が子供にするように、少しは力尽くで薬を飲ませます。

(完)

不変的理由と偶発的理由
(LES CAUSES PERMANENTES ET LES CAUSES ACCIDENTELLES)
1916年4月15日

殺人のようなこと、大使の不在、理解されない言葉、至急便の遅延、これらには多くの原因がありますが、こう言って良ければ偶然によるものです。兵力には、或る意味で原因に溢れています。同様に蓄積された火薬も爆発の原因になります。火花は偶然の原因でしかありません。言い換えれば、制度と出来事を識別しなければなりませんし、重大な出来事は制度が齎すと理解しなければなりません、ここでは武器、戦争の組織、習慣であると理解して下さい。

しかし、もし軍国主義が本当の原因であると人が言ったなら、既に余りに手輕過ぎます。軍国主義そのものは結果です。あるいはもっと正確に言うなら、国境の無い力、必要な場合には軍人の長官たち、軍人の論議、軍人の感情は、この種の力に対して冷静で疑い深くて信用しない一般的な市民たちに基づいて、その視線で寄せ集めるのは悪くなく、そうして収斂された原因によるものであると理解されます。政治的な自由及び法による平等、そこには偉大なる新しさがあります。そこからは先ず市民にとっての限りない義務が生じていますが、権利と相関しています。一人ひとりが自ら望んでいるのは責任ある意見であり政治です。一人ひとりは一寸した王です。しかし、それは大変に思いがけない結果を引きずりますが、それは管理する力であり、同意によるのであって暴力によるのではなく、歴史においても類例の無いものです。というのも暴君たちの権力は、彼らに近付いた者たちには偉大だったからです。しかし、野心のない者たちは自らを小さくして逃げていましたし、権力に対しての密かな疑念によっても同じ様に逃げていましたが、その疑念は民衆の格言の中に大変良く表されています。そして、避けられない賭によって統治者たちは、戦争の脅威を見せながらこの新しい力を試そうとしたり、強化しようとし、政治的指導者たちが成り上がり者の欠点をよく持っていることも注意しなければなりません、それは王者の中の王者、兵士の中の兵士になることであり、結局は最高の決闘の時の立会人のように不屈です。彼らは屢々礼儀に欠けていることもつけ加えましょう。私は陛下と呼ばれている最高の活動に基づくこの力を理解しています。増加する公務員の人数はその発言力が大きくなるや否や、既に政府見解により強い力を与えられます、何故なら単に気に入られたいばかりでなく、彼らに委任されている大なり小なりの権力に何時も少しは陶醉しているからであることも言わねばなりません。政治的メカニズムに関しては以上です。

軍隊制度も同じ理由から変わります。予備役の士官は、専門家と同じ軍人姿を見せたがっていると各人は理解しています。そして、一般的に穏健な市民は、習慣が驚きをすり減らしていた人間よりももっと大いに熱中して軍務に就きます。私は今でも、壮健な老兵を一人ならず見ました、恐らく彼は機会があれば皆と同じように勇敢に働くでしょうし、後方の持ち場を守っても素直に自ら良しとするものです。武装した市民は白状しませんし、心の中では精力的に戦いもする感情でいます。武装した市民を動かすためには、〈権利〉〈文明〉のように、感動的な動機がなければならず、乱暴な攻撃への正当な応酬であり、表に出るのは何でも良いのですが、特に全国的に何時も上手く活用する動機がなければならぬとも言わねばなりません。そして、この動機が昔の軍人の信じられない興奮を生じさせますが、彼らは或る時は勝利者で、又或る時は偶然に賭に勝った者ですが、その観念は同じではありませんでした。軍隊制度は、平和の間は厳しい批判と疑念を引き起こし、特権階級を固めて強くして、ばねのように緊張して、そして戦争という出来事を長く希望していた合法的な復讐と見倣していることに最後には気付くこととなります。そこから人間の暴力活動が行われ、もし古代ローマ軍団が戻って来たなら、恐らくびっくりすることでしょう。

機械論的秩序に話を戻しましょう。ここに私たちは何を見るのでしょうか。自由は金持ちに成ることであり、技術者になります。国民教育の発展は「読む価値のないもの」を増大させます。

鉱山、工場、仕事場が武器の製造を大いに準備しています。つまり武器のための特殊な産業であり、確実な利益で自然と興奮します。そして、直接的及び間接的に今度は戦争を推し進めます。結局のところ哀れなプロレタリアは暴力のための肉体を作り、暴力という観念のための精神を作りますが、規律がない訳ではありません。以上は、現代の戦争が前代未聞の悪の爆発を生む殆ど完全な条件を述べるものであり、文明を無視している訳ではなく文明の結果によるものであり、紛争で衝突している国民がより文明化されているだけにそれだけ益々恐怖であり、従って益々似てきて、まさに友人になろうとしていることに気付いて下さい。しかし、私はそこで何を言うのでしょうか。好戦的情熱の最高の結果は、他方では不当で野蛮で人間性の敵であるという両面を信じさせることにあります。それ故に、もし情熱に付ける薬がなければ、文明は美德そのものによって死なねばなりません。しかし、それは私が決して信じないことです。

(完)

戦争と教会
(LA GUERRE ET L'ÉGLISE)
1916年2月19日

私は、主任司祭、修道士、金モール三本の施設付司祭のことを話すことにします。正しくなければなりません、簡潔に話します。この戦争は、〈教会〉の政治家たちに巨大な希望を目覚めさせました。総動員令と同日に、修道士たちは舗道の割れ目から抜け出しました。彼らはもし間違えていたとして、あるいはそうでなかったとしても物理的苦痛や道徳的苦悩を当てにしましたし、私たちはよくそれを理解しています。金モール三本の施設付司祭は馬勒を持って村の通りを親しげに挨拶しながら散歩しましたが、軍人の荒々しさが伴っていました。彼らには劇場の影響もあり、それは私たちには恐ろしく見えました。私は、金モールのない歩兵の小さな司祭を大変に愛していたことも言わなければなりません、私は最前線に非常に近い所で聖職者の姿をしていた司祭に敬意をもって挨拶しましたし、他の秩序、力の秩序、確かな秩序、必然的な秩序となっている数々の徽章によって精神的強さを台無しにするものでもありません。しかし多分、それらの反動として多くの感情はあります。瀕死の人の枕元に何があり、何をするのでしょうか。私には分かりません。私は捏造したくありません。そうです、寧ろ教会の政治というものの勢力範囲を見抜くことであり、それは〈福音書〉の精神にも背いて戦争を推し進めて、戦争を享受しています。

(完)

戦争の不思議
(LA MYSTIQUE DE LA GUERRE)
1916年2月20日

宗教の主題、そして戦争と宗教との関係について言うべきことは沢山ありますが、見分けるのは容易ではありません。一人ひとり先ず、主任司祭や修道士たちを好戦的政治に投げ込むことが出来た些細な理由に気付くかもしれません。非宗教人の統治への反対、取分け急進主義者や社会主義者たちへの反対です。我が国では一般的な家庭教師である司祭が、軍人貴族を阿諛することになります。それは大災難の後の大きな変化への希望でもあります。しかし、こう言い終わっても私たちは喜劇としてしか考えませんでした。宗教的精神と戦争の間にあるのは、もっと奥深くて隠された関係です。あるいは寧ろ何らかの宗教的精神の人がいて、彼は最良の人ではないが戦争とは十分に和合していて、多くの将校の裡に見ることが出来て、全く率直と見做されている人です。先ず思い浮かぶのは、この人物は良くないということであり、従って最も困難な試練はやはり功績です。神の不可解な公平さに従ってその無実の人が、犯人の尻ぬぐいをするのと同じ考えです。結局のところ我が国も同じ考えで、長年に亘って不信心で軽快な人が大きな犠牲を払って立ち上がることが出来るのです。ここでは戦争の暗い不思議は見抜かれ、宗教が子供時代から当惑させられ、嫌な思いをさせられた人々には大変によく適合しています。

他の考えは、少なくとも表面上に拘わらず不思議ではなく、より一般的でより恐るべきで、それらの国民の大きな活動は、風とか雨とか火山の爆発以上に私たちの意志が多く関係することはありません。私は一度ならずこの考えを思い出します。私は一度ならずそれに眼を通します。それというのも、それしか見ない者は情熱に溺れ、神々の特徴としてのホメロスの英雄たちのやり方で考察するのに戻るからです。そして、これらの巫女の魂の中でこれから存在するであろうものの前兆として受け取る怒りの力や、その同じ怒りの力によってこれから存在するものの力を判断して下さい。ここで言えることは、その予想は何時も吟味されているということです。というのも、もし私が怒りを信じるなら、怒りは影響を及ぼします。その怒りが物語っていることをまさに行います。情熱的な魂は、この宿命論者の考えで全て行動します。しかし、もしこれを活動中の恍惚と呼べるなら、陶醉とか狂信的行為が既にどのくらい強くなっているのか、その時は情熱が群衆の中に増大し、叫びや身振りや行為や行進曲や突撃の曲となって、一人から一人へより強く新しい波紋を呼びます。それは神が彼らと共にいると言って感じる時でもあります。そして多分、アナーキズムの創始者プルードンが色々と考えたように、〈神〉の観念はまさしくそこからやって来るのです。〈神のお望みです〉は、真実以上を説明する戦場の叫びです。この眩暈に対して私の理性的な話は何も出来ません。そして既に一度、私は彼らと一緒に前進するのを拒んでいません。少なくとも規律正しい市民の頑固さは、狂信的な熱狂よりも長く続くことは十分にあり得ます。

しかし、情熱の中でも沈黙してこの観念を考えて見ましょう、それが一つの意味と力を保存しているか見てみましょう。私は保存していると十分信じています。

(完)

決定論と戦争宿命論
(DU DÉTERMINISME ET DU FATALISME GUERRE)
1916年2月21日

アナトール・フランスの『喜劇の歴史』の中で、民衆的な〈決定論〉と呼ぶことが出来るものの大変に輝かしい報告を読みましたが、それはあらゆる出来事は、人間の意志を含んでいて、天体の運行や太陰月と同様に原始の星雲に予め決定されていたことであると言うものです。そして、それ故に私たちは病気になるとか、体の調子が良いのは外的要因によって決定されている如く、その様にして悲しくなったり楽しくなったりして、望みを持つとか絶望するとか言うのです。私はその考えを理論にする話に加わりませんし、その観念は体系的に確かに地位を占めていて、要するにその地位やその段階には真実しかなく、他者によって支えられ決定されているのです。しかし、私は〈概評〉の中で最も困難な部分に加わります。そして、見知らぬ読者であるあなたを侮辱せずに、私は非常に高度なものを目指すことも想像します。この決まりきった決定論は最も根本的な数学にしる物理にしる、それらの根っ子を恐らく十分に把握せずにいた人間たちは、或る種の野性的な喜びを受け入れていることに私は気付きました。彼らはそれをよく認識することなく愛し、彼らにとっては理性的に見えるだけの宿命論でしかないと思います。迷信的な心に敏感に影響を受けていたと思います。従って彼らが作り、重大な結果を生んでいる習慣を考えて見ましょう。というのもここでは抽象的観念による遊びは重要でなく、私が毎日振り回されていると感じている実際の致命的な不幸な規則が重要であるからです。それは次のように答えるこの英知を無視して、同じ高さの人は誰もいません、「この戦争は避けられたかも知れないとあなたは想像している。それ故にあなたは戦争の遠い原因も知らなかったのだ」。しかし、ヨーロッパが既にこの深淵の端に落ちることなく何度もいたのを示しながら、もしあなたがこれらを少し推し進めたなら、その時は彼らも腹を立て、彼らの予言する心を示して、戦争が起きた瞬間から避けられなかったことを激しく言いに来ます。そして、それも宿命論であり、直感的な宗教と大変に強く結びついています。要するにそれは神の御心を信じることであり、人民の集団的本能のようなものを信じることであり、あるいは歴史的な原因とか少なくとも政治的な原因を信じることであり、私は消極的で腹を立てている魂と何時も向かい合っています。私はこの怒りを理解しています。絶望を凌ぐ絶望があり、それは彼の不幸そのものに同意した観念を、出来事後で推測することです。それ故に私は、塹壕で殺された息子に涙する母親に弔意を表しに行きません。私の状況は次のとおりです。戦争に最も苦しむ者たちはまさしく、この恐ろしい狂気を治す何らかの薬を探すことが一番少ない者たちです。悲しいかな、私はそのことをよく理解しています。でも彼らにとっては遅すぎますし、恐らく存在し得たような過去についての見方は全てが彼らの力を越えています。しかし、私は障害を見ないで私の道を行きますし、そうしなければなりません。というのも私は決して成功にこだわりませんでしたし、勿論成功しようとも思いませんでした。私は、見知らぬ多くの死者たちとそのことを約束したのです。

(完)

宿命論と狂信的行為
(DU FATALISME ET DU FANATISME)
1916年2月22日

狂信的行為は多分、その人間によって実現される恐ろしい宿命という感情以外の何ものでもありません。もし人が予言を望んでも、ヘーゲルが話すように宿命論者の魂は注意深いのです。彼は徴を探して呼び寄せます。徴の前に行きます。呪文を唱えて探します。一方では軽蔑し、遠ざかり、徴の無いものは全て暴力によって黙らせます。他方では魂そのものや他の魂に呪文を読み上げながら、巫女状態に向かって訓練します。この観点によって〈宿命論〉を或る意味で理解しますが、それは基本的に戦いであり、何よりも固い意志と人間的希望と理性的なあらゆることに反対している戦争です。全ては不信心そのもので、単に徴への無理解ばかりでなく、魔術師が認めている徴とは逆に影響することによるものでもあります。従って私たちが証明したいことを、彼は既に知っています。彼は合理的な人間なのです、そうです、唯一の合理的な人間である彼は、神秘主義者の間でも多くのことが出来ますし、世界中の眩きである徴を言う者たちを黙らせるまでになります。しかし私が見る処では最も偉大な善も彼らにとっては不信心であり、淫猥であり、冒涇です。宗教的議論というものの根底には、その葛藤があります。そうです、家庭のテーブルにもあります。そして、私は安楽椅子に髯を生やした巫女を見ました。そこから宗教的な葛藤は、〈戦争〉と〈平和〉の葛藤に深く結びついていました。そして、その点についての議論というものは、既に戦争です。

しかしもっと正確に言うなら、〈宿命論〉は戦いであり、そのとおり戦争です。私はそのことを強調します、何故なら賢明な人が狂気を理解しなければしない程、彼自身が憤慨、野蛮人の復讐、野蛮人の復帰に陥る危険を負うからです。そして、〈宿命論〉とは戦争であると私は言うのです。マホメット教徒たちの有名な譬えではありませんが、彼らにとって戦争は基本的に義務であり、あなたは私に困難な道へ行くことを促します。それは学者風な外見をしていても、実際は大部分が既に或る種の呪文でしかなく、決定論を一つずつ反駁することよりも重大なことであり、それと同じ位に困難です。それ故に如何に〈宿命論〉が戦いであり、そして同時に〈宗教〉であるか理解しましょう。私が言う昔からの宗教、本能的な宗教、動物的な宗教も戦いです。そのことは十分説明されていて、絶対的な戦いは真っ昼間に行われ、平安が軽蔑され、憎まれ、迫害されればされる程、戦いを最も恐れる人々によって賢者は最早驚かなくなります。そして取分け、慎重さを原則とする如く、恐怖を当てにするのは全て止めて仕舞います。私は先制して前もって行います。私は結果に気付かされます。今はその主要な観念に戻りましょう。

(完)

宿命論と悲劇
(DU FATALISME ET DU TRAGIQUE)
1916年2月23日

ここで私は宿命論という観念を巡り、強い偏見を再検討して少し時間を無駄にしてみたいと思います。少なくとも読者は最も良く理解したものを再読するには、少しの時間を無駄にするものです。もしそれらの観念を良く把握したいと思うなら、私がここで説明する観念は、把握するのが特別に困難ではありません。しかし驚嘆する観念というものは、それを見詰めたくないと思えば思う程に把握するのが困難です。情熱的な人間は何時もこの無遠慮な観念が、もう決して彼を悩ませに戻って来ないことを希望しています。そして、その望みには余りにも多くの根拠があります。それ故に、或る意味で提示されているものを注意深く見詰める者には不可能かも知れないとはいえ、明白なことを否定するのは大変に容易です。しかし、もし見詰めたくないとするなら、誰が見詰めることを強いるのでしょうか。真理は誰の袖も引っ張りません。例えあなたの両手が開いた儘いても、真理は置かれていません。例えあなたが真理をしっかりと握ることなく擲んだとしても、あなたから去って行って留まることがありません。

私にとって運命は悲しい時間の中で、待つことの長い時間を与え、夜の長い歩哨の時間を与え、霧の中では長い歩哨の時間を与えました。そしてそれは同時に、恐らく百回も繰り返された専制的な考えからそんなにも逃れるためではなかったのであり、情熱の確信に強調されるものでした。しかし回り道によって、殆ど全ての執拗さは冷酷になるまで行きましたし、二十歳の友人たちを無言にさせ、これらのことを考えるための本当の道が示されましたし、それは希望を持つとうとする者に最高の動きを憎んで最悪を信じるこの奇妙な興奮を先ずは説明することでした。

宿命論にはその底に、この悲劇的情熱があります。そこにあるのは力とその証であり、荒々しい野生の満足のようなものです。理由をよく理解しなければなりません。悲劇とは、人間に働きかけている宿命であるとよく言われてきました。最も感動的な悲劇とは、恐ろしい運命に出会い、深淵の中に身を投じるような人間の光景です。あらゆる情熱にこの性格があります。決して偶然の出来事でもなく思いがけないことでもありません。熱狂者は自分の運命を見ましたし、それを恐れていると同時に望んでもいます。そこで運命を妨げることが出来るものの上に勝利があります。かくして人は懲罰を受け入れるまで罪ある愛に陥りますし、その間違いには償いへ向かう道しかありません。その上で古代ギリシアの悲劇詩人アイスキュロスやシェークスピアを少しは読んで下さい。この考えを人に教えるために、序でに喜劇も情熱が主人であって、機械化されている如くであるという相違はあっても同じ観念によるもので、同様に良き精神もそれを理解していたと言うのも無駄ではありません。〈運命〉だと言う感情を前にして責め苦へ走らされますが、それが悲劇を創らせるのに反して、全て剥き出しの決定論が喜劇になると殆ど言うことが出来ます（モリエールの喜劇「守銭奴」の〈持参金無し〉のことを考えて下さい）。

今は、最も悲劇的な悲劇は何であるかを理解しなければなりません。それは人間の顔をした〈宿命〉です。予感とか期待でないとしても、自然の大災害に悲劇は僅かです。しかし、人間の不幸に悲劇は姿を現します。もしその人が恐い運命に従ったなら、検証も無く〈宿命論〉があるのが問題点です。しかし、決定的な証拠が突然に分かるのも問題点であり、犯罪や自殺のように人間が予言したり期待したことを行うのも問題点です。もっと正確に言うなら他の人間が、少なくとも人間の不幸に対して、同じ高慢な絶望によって協力するか否かです。従って宿命の感情が戦争に満足していたのは勝敗が求められていて、証拠の中の証拠である大きな証拠として絶えず必要とされていたもので、それは有害な絶望した人生というものを正当化しているものです。この感情は恐怖で震える心の底にあります。それは恐怖というもののの中にあります。理性的で純真な希望というものに対して発揮されます。私は偉大さを少し感じさせてくれる詩人コペに或る日会いましたが、彼の老けた辛そうな顔は幸福になる権利を糾弾しています。それと同時に彼の講演

は〈共和国〉を激しく軽視する言い方であり、戦争への恐怖は非常に野性的精神に似ていました。私たちが見たのは、皆と一緒に未来に働きかける悪の予言者でした。それ故に出世しなければならない者は全てが純粋に人間的にそして意志的に最悪の不幸を齎すのは本当であり、何時かは恐怖と共に遠ざかる意志というものもありますが、それも意志によるものです。私が使命と言っている一兵士の死が、如何にして欲望や悲しみや軽蔑や宗教で一杯の人生を立ち直らせて結局は正当化しているのか、あなたは理解しているのでしょうか。私がそれに拘っている間は、一兵士の死とギリシア神話で予言と変身の能力を持ったプロテウスをよく見て下さい。

(完)

宗教又は無宗教
(RELIGION OU IRRÉLIGION)
1916年2月24日

憎んではならないと私が言ったのは正しかった、と今は理解しています。何故なら、取分け気楽に寛いでいる軍人というものは、理解されることがありませんし大変に憎まれているからです。そして、国家権力の平凡な召使いでもあるからです。しかし、確かに彼らの中にも悲劇的な深刻さがあります。その上私は、彼らが歳を取って力を持ったら、殺されるかも知れないとよく思うからです。というのも殺されないのは誰なのでしょう。私が彼らの中に誠実で奥深いものを見るのは、全てが拘束されていて、何時も悲しく運命づけられている崇拜さがあり、そして不幸に終わる者にはあらゆるものの中で信賴、希望、進歩というものを否定する強い確信があります。彼らと同じ人間は、人間の生業を変えられると信じるのが殆ど下品で狂っていると考えて、社会主義者たちを強く憎んでいます。私は彼らの奇妙な情熱の火を理解していますし、それは要するに〈共和国〉、平等、正義、平和、勇気に対する或る種の果敢さです。私はそれらに何時も頑なになって挑んでいると感じていましたし、それまでの間に所謂青春は過ぎ去りますが、本当に私はそれを誓います。今は苦痛から助けること、彼らの息子たちを助けること、そして寡婦暮らしで既に最悪の悲しみにいる娘たちを助けること以外に何も望まない私に対して、だんだんと怒り狂って軽蔑し苦々しいのが私には分かります。しかし、彼ら自身がそれを敢えて望まない時に、彼らの目がそれを望んでいることは罪であると認めて下さい。結局のところ、自分を解放する思考において何時も彼らが判断することは反逆であり、何時も彼らはその悪魔を追い祓っています。それは正義です。もし私が正しいことを少しの間でも彼らに見せられるなら、彼らにとっての如何なる絶望も言わせて置くとか、やらせて置いた後です、いや賛成し喝采し崇めた後のことでした。そして、この感情は宗教であると私は言います。それが宗教というものであり、儀式は何も変えないと私は敢えて言います。しかし、本来それは無宗教であるとも言いたいのです。私は宗教のことを考えたいのであり、キリスト教のことを言っているのですが、それは存在し得るでしょう、寧ろ原則に従って存在しなければなりません。

(完)

宿命論が持っている美のこと
(QUE FATALISME A UNE CERTAINE BEAUTÉ)
1916年2月25日

今、私は入りたくもない道に入って些か後悔して思考するために、本を読むことを少し止めています。或る種の野生的な強固な喜びで死へ歩いているバイロンの劇詩『マンフレッド』を私は愛していました。そして、今の時代はマンフレッドなのです。彼が非常に私を感嘆させたことは誰も言えません。私は多くのものの本当の美しさ以上に美しいものを見た信じますし、それは重大な行為の勝利者になることであって、その人間が自分自身に尽くす義務があるためには外部からの支援はなく、神もなく希望もありません。しかし、私は大地からそれも見過ぎました、そして大地の上空にいる鳥たちよりも僅かに大きなものです。才能や覚悟や忍耐が大きくなれば大きい程、美德には外套が無くすっかり裸で、私が予想出来るやり方で、或る確実な一撃で全てを破壊し、似たような状況にあつては最も高潔な人が真っ先に死にます。決して忘れないためにもやり過ぎです。ホメロスの叙事詩『イリアス』よりも美しい時代を祝うためにもやり過ぎです。そうです、崇高な言葉なのです。しかし、直ぐに死という罰です、もっと正しく言うなら、最も巧妙な暴君によるものです。そして一言で言うなら、詩人たちは喜び過ぎていると思います。万事上手く行き過ぎです。不平を言いたくなかった人々が、不平を言う必要はないと言うのは言い過ぎです。そして、若者たちが踊っている時の老女のように、詩人たちをもっと興奮させるためにシンバルを叩くのは良くないことです。英雄が別の理由で罰せられることは、何時も起きていることです。しかし、私は彼がいる前では、それらの理由を言うしかありませんでした。英雄は私には十分足りません。力に対する障壁です、何故なら障壁も力になるからです、そして激しい恐怖に備えます、何故なら別の理由がなければ、それは激しい恐怖になるからです、そのことは私が木造家屋でゆっくり眠るには百回で十分でした。彼らは理由を夢想し、そして私は彫刻に望むように裸体を望みます。私は彼らの偉大さだけを信用しています。でも人間ですし、もう何も偉大ではありません。正義、文明、祖国、神、試練、犠牲という彼らの観念の全てを私は、少なくとも望む覚悟において彼ら自身の源泉まで達します。私はそのキリスト教徒を無視します。少なくとも禁欲主義者を重視します。そして再び彼は、その深い悲しみの中へ私を隠したいのです。そうです、私は何も無い天国の下で、価値ある人間たちと向き合って全てを捨てることを理解しますし、彼らも同じ様に裸です。既に半分は墓に這入っています。身内の者にも裏切られますが、大変素早く自分を慰めます。何でもないと見做します（人間の破滅とは何でしょうか。新聞は少なくともそれについて語りません）。その様にして独りであり、事に当たって勇敢に立ち向かうことが出来ますし、立ち向かわねばなりません。彼自身の中で亡命したのです。全くの貧乏ですが、彼自身の中では無傷の財産というものを見付けます。全てが絶望的ですが、彼の人生と同じ位に生命力の強い希望を見出しています。それ故に銃後で持たされている雄弁という武器や、アカデミーの飾りや、カトリック教を作っている確実に尊敬すべきもので財産となるものを全て投げ捨てることです。全てが裸です、そうです。そして、死ぬまで続けます。私には分かっていますし、分かっていました。私がそれを予想したのも多分、独り私だけです。それでどうしたのでしょうか。私があなたや詩人や政治家やアカデミー会員たちと一緒に楽しむことを、あなたは望んでいます。何故なら貴族のように上品になるからです。いいえ、違います、私は英雄が倒れて、弱者が称賛される、二つの事柄を見分けたがる厳しい判断力を守りました。そして、この雄弁術というものが私に嫌悪を催させます。いいえ、違います、私は古代ローマの剣闘士の遊びを愛しません。

(完)

自分自身への嘘
(MENSONGES À SOI)
1916年5月9日

私は所謂素晴らしい手紙を沢山読みました、或る意味で素晴らしい手紙です。大変に親しい若い友人たちから貰った私宛てのものです、皆殺されました、あるいは危うくそうなる所でした。手紙は直ぐに燃やしました。返事も書きません。何故なら次のように言わねばならないと思ったからです。「あなたは参戦しているこの戦争のことやあなたを待ち受けている死のことを書いています。しかし、あなたは神の恩寵で死にたいのだと私は理解しています。そして、それは決して私にあなたに求めていることではありません。その美しさは余計です。私はローマ皇帝ではありません。私はあなたの慰めにならない哀れな人間です。いいえ、違います。そうではありません。私は、あなたが聖杯にそっぽを向けず、苦しくても、飲もうとしたことを愛しています。勿論、あなたは苦しくても飲みました。あなたは私を裏切りません。老いた先生を裏切りません。あなたは少し冷笑的な人に成るかもしれませんが、十分に償わねばならないと私は考えます。結局のところあなたは力があつたのです。このことを考えてから始めて下さい、あるいは何も考えないで下さい。もしあなたに力があつたとしても、義務は何でしょうか。倫理と戦争の混合とは何でしょうか。悪の混合です。あなたは強制されておりました。歩兵の最下等として強制されておりました。そして死の苦痛の下にいました。塹壕にはそれらが齎されておりました。それらの人間たちが攻撃の時に、将校を胸壁に上げた話をしてるのを私は聞きましたが、次のように言っていました、「前へ進め」。あなたはそれを待ちませんでした。よろしい。あなたは運命よりも早く走っていましたし、人間としての力を結集し、無罪を宣告された美しい顔つきをして、拷問へ向かっていました。しかし、何故私は自分を慰めたいのでしょうか。何故あなたが人生を愛していることをその次に私に言わなかったのか、それは仕方ありません。そして、あなたにそれを与えるのは辛いことでした。この非難を皆に委ねなければなりません。「主よ、あなたは何故私を見捨てたのですか」。あなたは少し厳しくなりましたが、何よりも公平でした。そして、あなたは恐らく嘘を付いて慰める権利は持っていませんでしたし、女性に対しても同じでした。この嘘は十年以内に百万人の若者を再び殺すかも知れません」。

(下巻へ続く)

アラン「文明国の戦争で真の原因になるもの（上）」

<http://p.booklog.jp/book/61213>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61213>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61213>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ